

No. 213/111

基督教約説

神學博士 スピンチル 著
牧師 三並 良 譯

明治二十五年印行



斯比納爾先生猶在我邦集諸生說基督教之要領授以獨逸語頃者友人三並君良譯之於邦語爲一小冊子以公于世名之曰基督教約說夫宗教者實行非空理可求之于心底不可探之于腦裡也此書譬之人身蓋皮膚骨骼耳筋肉血液藏在于聖經讀此書者不可不讀聖經也雖然聖經浩瀚況世間有好拘泥文字墨守朽腐之說以惑天下之耳目者教理之要益不易得知也今此書一小冊子而能極天地之高大能盡理性之幽微真不負約說之名其說斬新其論正確可以啓蒙可以解惑讀聖經者又必不可不讀此書也嗚乎此書與聖經相須之股如斯試執之對照而讀則至善至慈之像宛乎現于眼前

二
矣夫自由神學者獨逸神學之花斯比納爾先生是我邦自由神學說之首唱者三並良君則我邦自由神學者之先登而此書實我邦自由神學書之魁志於道者不可不讀此書也明治二十五年二月向軍治

基督教約説は恩師スピントル先生の所講にして同窓の友三並良君の翻譯する所に係る

此の書の由來を尋ぬる時は凡そ六年の過去を回顧せざるべからず當時先生の門に遊ぶもの未だ甚だ獨逸の語を能するものなし先生亦素より未だ日本の語に通せず先生茲に於てか平易簡明に基督教の要領を約説し諸生をして字を積み句を重ねて之を筆記せしめ其字義を釋き其主旨を闡き彼等をして辛ふじて基督教の眞理を味ふとを得せしめたり後半歳我儕同人其散逸を防がんが爲め二三の筆記を参照して甲乙相補ひ彼我相正して之

を崑崙版に附し懇望者若干名に分頒せり爾後其筐底に埋没すること年あり客歲初春先生の將に父母の國に歸らんとするに及んで先生に請ふに其校閱添削を以てし之を翻譯して弘く世に公にすることゝなせり先生即ち之が翻譯を三並君に托す

此の書は勉めて遺傳の教義を攻撃せず然れほどて強ひて之を辨護するにもあらず全く教義的基督教の介殻を蟬脱して一直線に自己の客觀的信仰を叙述したるものなり惟ふに基督教の内外に對する批評攻撃の最も少く論旨の最も積極的なるものを求めは恐らくは未だ我が

黨の基督教約説に及ぶものなかるべし

我が國の基督教社會に於ては未だ吾人を解せざるもの多く故らに解せざらんと欲するものも亦た少からず往吾人を目して常に批評攻撃をのみ事とし消極的破壊的の議論をのみ勉むるものなりとす然れども是れ決して當らず殊に我が黨の宗スピンチル先生に於て當らず彼の種の人宜しく此の書を一讀して人を評するの忽にすべからざる事を知るべし

此の書の譯者三並君は先生を識る最も久しき人なり初め基督教を福音教會の宣教師フエーグライン氏に得て

六
洗禮を受けたり當時三並君獨逸學協會學校に在りて學
ぶ偶々先生の渡來するに逢ふ時の教師ドクトル、ヘーリ
ング氏君のクリスチアンあるの故を以て直に先生に紹
介す茲を以て二君夙に相識るのとなり後或は獨逸學
協會學校に或は新教神學校に長く師弟の交りあり此の
書の君の筆に翻譯せらるゝ正に其の人を得るものと謂
つべし

今や此書世に公けにせらる以て聊か先生の苦心に酬ゆ
るに足るべく又世の先生に親炙する能はざるものをし
て大に得る所あらしむるを得べし余茲に其の勞を譯者

三並君に謝す

千八百九十二年礪川の僑居に識す

丸山通一

時維れ明治十八年九月中旬ありき先生始めて傳道の爲
めに我東京に來る未だ一週間を出でずしてドクトルへ
ーリング氏余を先生に紹介す爾來余は先生の卓説に服
し且つ其の人とありを敬慕して師事せり余亦た深く心
に決する所あり身を傳道事業に委せんとを欲せしを以
て日夜先生の薰陶を受くるに至りたり抑も先生が諸學
校學生の爲め系統的に基督教の要旨を講せしは明治十
九年の春を以て其の嚆矢となす而して此の書の原稿た
る筆記は先生か明治十九年の秋より二十年の春に亘り
たる講義の際筆記せしめし所に於て即ち先生の第二回

の講義たり此時より漸く世上の所謂自由派基督教なる者世人に知られんとせり明治十九年の秋は則ち矢野文雄氏報知新聞紙上に於てユニテリアン教を我邦人に紹介せしの時なり此の時に當り京都の人香山普次郎君と余と先生に請ふに其の教説を一冊の書とあし世に公にせんとを以てせり然れども先生時尙は早く内備未だ全からざるを以て之れを非となし余等の議を退けたり爾後時熟し且つ本書の如き書あるの必用を見しを以て先生に其の講義を公にせんとを請ふもの多し先生之れを許諾せり幸に筆記のあるを以て之を翻譯するに決す然

るに歲月は人を待はず早く既に明治二十四年を迎ふるとなり先生將に再び渡海故山に向はんとす故に再び其の筆記を校閲し削るべきを削り加ふ可きを加へ之れを余に付し語るに翻譯のとを以てす余元と文字に拙劣なるを以て翻譯の任に當るべき者にあらずと雖も先生既に之を欲す余焉ぞ其の意に背くを得んや先生の欲する所なるを以て余好んで之れを爲さんと欲し乃ち之れを諾せり然ども爾來余甚だ多忙遂に空ししく復た一年を経過し始めて先生の命をなすを得るは余の自ら深く慚愧する所なり

翻譯成るに及んで余が同窓の友人向軍治君は序文并に
 スピントル先生の小傳を丸山通一君は序文を贈らる之
 を以て更に本書の光彩を加へたり是れ余が兩君に深く
 謝する所あり

先生の著はす所元と講義に基くを以て卷、篇、章の如き區
 別を爲せしに非ず其の區別は余讀者の便を計り試みに
 附せしも其の順次は原稿のまゝになし少しも之れを改
 めさりしを以て適當の區分を爲し能はさるものありた
 り上卷第五篇第一章神に對するの愛の如きは倫理の部
 に屬すべく下卷第一章聖式論の如きは寧ろ教理論に屬

すべきものならん且つ來世に就ての章は筆記に漏れし
 を以て先生其の持論を一葉の紙に認め渡海の前數日余
 に與へしも余誤て之れを失ひ復た發見する能はず故に
 止むを得ず余の記臆と先生が嘗て新教神學校に於て教
 義學講義の際論述せられし所とに基き余自ら一文を草
 し下卷の終りに加へたり此の章も亦た上卷に加ふべき
 ものならん余尙は先生の文を乞ひ他日を待て之れを改
 めんとを期す讀者之れを諒せよ

明治二十五年一月

東京に於て

自序

余が此の書を著述する所以のものは、基督教の要點を知らんと欲する讀者の爲めに、基督教の要義を簡約に説かんと欲するに過ぎず。故に基督教々理と倫理とを學術的に詳論せんとおせしに非らず。然れども亦た此の書が基督教諸教師の教授の手引となり、書中指摘する所の要點を補綴するに各、自己の意見を以てし其の教授に便ならしむるあるを得は余の幸あり。此の書たるや原と余が嘗て諸學校の學生に講義せしの際、筆記せしめし者を更に校正増補したるものなり。余の之れを世に公にする所以

のものは、日本の朋友の希望に原因す。余は本書に於ては
哲學神學の研究に因りて成れる結果を通俗躰に叙述す
るのみに止めたれば、學術的精細の證論を爲す能はざり
しあり、然れども余は尙ほ自ら異日を待て此の責任を盡
さんとを期す。

千八百九十一年二月十日

東京に於て

スピンナール

基督教約説目次

上卷 教理約説

緒論	宗教史概説	一
第一篇 基督教の原書	九	
第一章 舊約聖書概説	九	
其一 歴史の卷	九	
其二 預言者の卷	十七	
其三 詩歌の卷	二十	
第二章 新約聖書概説	二十三	
其一 歴史の卷	二十四	
其二 文書の卷	三十	
第三章 聖書の價值	四十	

二
第二篇 基督論……………四十七

第一章 基督教の創立者……………四十七

第二章 耶穌基督の死……………五十四

第三章 耶穌基督の復活……………五十九

第四章 耶穌基督復活の解義……………六十

第五章 耶穌の榮名……………六十二

第三篇 基督教の發達……………六十三

第一章 基督教の變遷一斑……………六十三

第二章 「プロテスマント」教の本旨……………六十六

第三章 神の國……………七十一

第四篇 神論……………七十二

第一章 神……………七十二

第二章 有神證據論……………七十五

其 一 宇宙的有神論……………七十六

其 二 終局的有神論……………七十九

附 害惡と有神論……………八十六

其 三 道德的有神論……………八十九

其 四 宗教的有神論……………九十五

第三章 神の性質……………九十六

第四章 基督教の三位一體論……………百

第五篇 人間論……………百三

第一章 神に對するの愛……………百三

第二章 人間と動物……………百十

第三章 人間の道德宗教的發達……………百十一

第四章 罪の結果……………百十二

第五章 律法の地位……………百十四

第六章 更生……………百十七

第七章 信仰の結果……………百二十二

第八章 更生を補ふもの……………百二十三

下卷 倫理略説

緒言……………百二十五

第一篇 自己に對するの義務……………百二十六

第一章 生命健康……………百二十七

第二章 浮世の資産……………百二十九

第三章 名譽……………百三十一

第二篇 世に對するの義務……………百三十三

第一章 他人に對するの關係……………百三十三

第二章 人間社會に對する基督教の地位……………百三十六

其一家族……………百三十七

其二國家……………百四十一

其三教會……………百四十四

第三篇 信仰を強むる特別の方法……………百四十六

第一章 聖式を論ず……………百四十六

其一聖洗禮式……………百四十七

其二聖晚餐式……………百五十

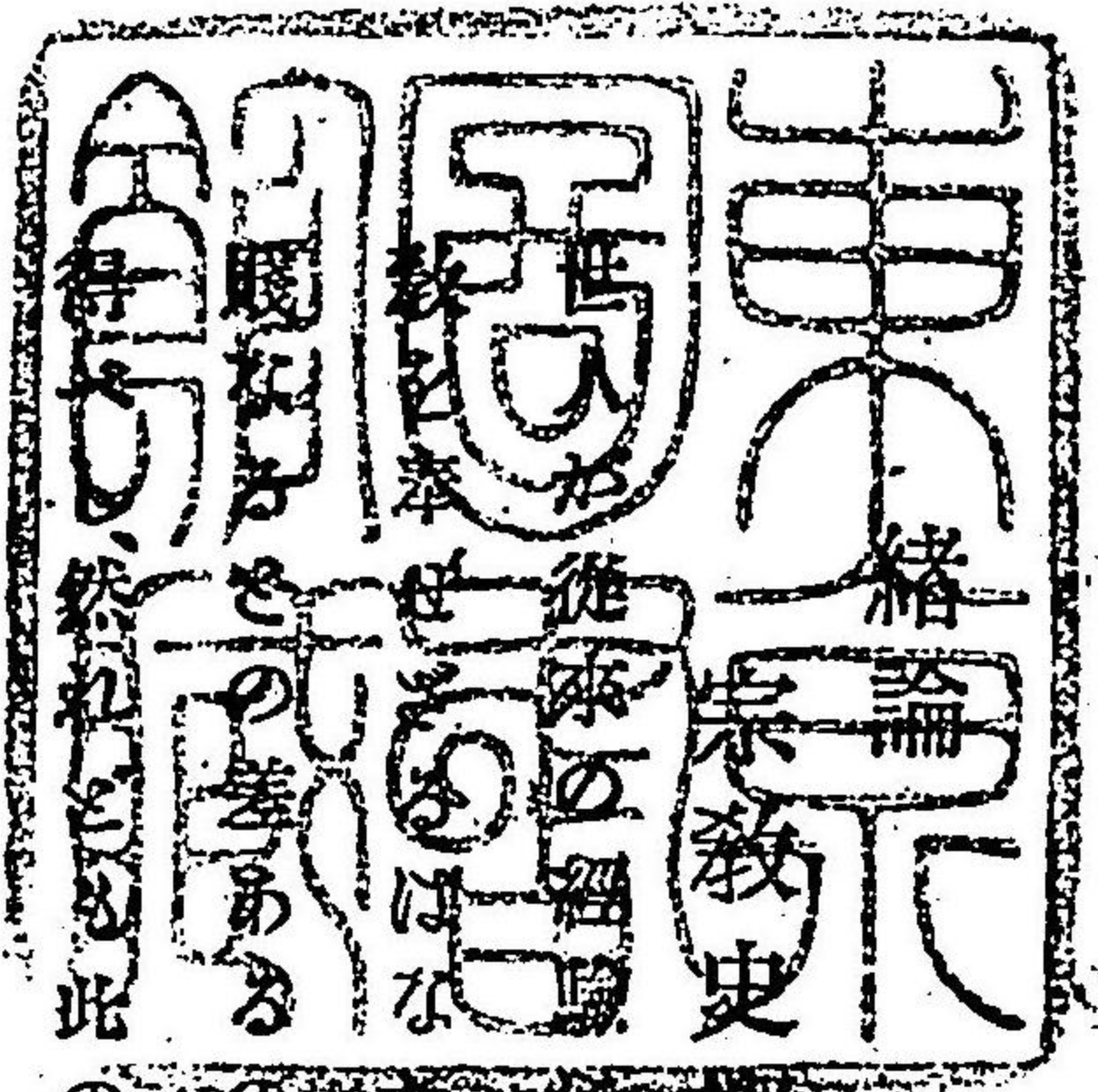
第二章 安息日を論ず……………百五十四

第三章 祈禱を論ず……………百五十六

第四章 來世に就て……………百五十八

上卷 教理約説

神學博士 スピンチル 著
牧 師 三 並 良 譯



緒論
宗教史概説

に基き之れを考案するに地上至る處の民として宗教に奉せざるはなし、唯だ其宗旨其の文明の度に應じて高尙なると卑賤なるとの差あるのみ、吾人試みに之れを區分して左の等級となすを得、然れども此の區分を示すに當り豫め注意を加ふべきは、各等級間の區分は極めて分明にして截然たるものに非らず、設之ば一國民の信奉する宗教中には復た他の等級に屬する諸宗教の分子をも含有するところある是れなり。

第一 最下級の宗教 此の等級にあるの宗教を拜物教とす、拜物教の人は一塊の石、一片の木を取て以て神となし、之れを崇拜するものなり。而して其の此れを神とし崇拜するや、毎に人意向背の専恣に任せ利福を與ふるの魔力ありと信せらるゝ物は之を拜し、若し利福を與ふるとなく或は反て禍害を與ふと信せらるゝに至れば、直ちに之れを棄つ。故に今日敬重崇拜せらるゝものも、明日は之れを放抛して人獸の踏む所となり更に復た顧るものなく、更に他物を求めて之れを崇拜す。

第二 之れに次て稍上にあるの宗教は自然力、自然顯象を神とし之れを崇拜するものなり、即ち閃々たる電、轟々たる雷、輝耀たる曉天、澎湃たる洋水、颯々たる風等皆な其の崇拜する所のものなり。

第三 天躰崇拜教は燦爛たる光明を放ち、萬物に生氣を與ふる自然躰を神とし拜す、日月、星辰等皆な其の崇拜する所なり。

第四 禽獸崇拜教は即ち禽獸を崇拜するものにして、其の然る所以は或は其の暴威、悍猛人を懼怖せしむるに因し、或は其の美麗人目を眩するに因す。謂へらく強剛美麗の理想凝て獸となり、禽となると。或は其の人に利あるが爲めに祭らるゝものあり。セミチック人民は獸を祭り、後印度人は象を祭り、埃及人は「イピス」と「アピス」を祭るの類亦然り。

第五 更に一步を進めては自然顯象を取て直ちに神とし視ず、自然顯象自然力を以て神の體となし、之れに宿するの靈躰あると、猶ほ人躰内に精神の宿るが如しとなすなり。故に日月、風電、水火は直ちに以て神となさず、而して日神、月神、風神、水神、火神等を崇拜す。

第六 始め自然顯象の崇拜せられて神となされしものも、遂には其元來自然顯象なりしを忘却せられ、高等なる存在者なりとのみ思惟せらるゝに至る、例せば「エピタル」神は元と雷にして、天照皇大神は元と太陽

なりしも。後世に至り其の雷或は大陽なりしを思ふものなきが如し。希臘、羅馬人の神とし崇拜する者は即ち皆な此の類なり。然り而して此の種の神拜は多神教の最高等に位す。

多神教より進では則ち唯一神教に入る。是れ宗教の最高等位を占むるものにして回々教、猶太教、基督教是れなり。

第一 回々教は其の起るの日、三唯一神教中に於て最も晚きものなりと雖も、其位最下にあり。祖師名をマホメットと謂ふ、紀元後六百廿年の頃始めて法を傳ふ。此の宗の經典を「コーラン」と云ふ略に曰神は唯一也、アラールと稱すアラールの外神あらず。回々教のみ獨り真正の宗教なり。他宗と其の信徒にして回々教に歸依せざるものは悉く斬滅せられざるを得ず。余マホメットは神の豫言者なりと。マホメット又た宿命説を説く、宿命説とは各人の命運禍福は其の至微の事と雖も悉く既に生前

神の定命する所なりと説くものなり、故に人生中の事最大となく、最小となく、悉く神の預定する所に出で、生死の如きも亦た預定の中にありと、是れ回々教徒の戦闘に勁悍なる所以なり、回々教は曰く、三尺の劍以て萬邦を定めて我宗教に歸せしめざるべからずと。其の徒は死後の生を信じ、天堂を區分して七品の段階となし、之れを飾るに寶絡、金繡人を引誘するの色を以てす。其れ然り回々教の妄想に富み、邪言を逞ふする實に厭ふべきものあり、然れども吾人は亦た其の唯一の神を崇拜し、慈善節養を奨勵し、兩親長上に敬事し、遠客を懇待するが如き思想を養成せし功を頌揚せざるべからず。

第二 猶太教 耶蘇の降世に先づ千有二百載の上古世を擧て多神教を信奉するに當り、萬綠叢中紅一點獨り唯一神教を奉する國民あり、之れを猶太人となす。其の奉戴する神則ち一、ヤーヘと稱す、後人訛してエ

ホフアと云ふ。然れども猶太人は元と拜星教を奉せしものにして、猶太教は實に拜星教より脱出進化せしものなり。其教祖をモーセとなす。傳に曰く、モーセは十誡を神授して其の民に教へたりと、(出埃及記廿章一節一十七節)其の教ゆる所に云へらく、神は唯一にして靈、嚴にして正、永劫にして全智全能、善を賞し惡を罰す。猶太人は曰く、我邦人は神と契約を結べり、我邦人は神より撰擇せられたる眷愛の民なり、我邦人は他邦の民と混するとなし、無穢にして清淨ならざるべからずと、如此思想之れを鎖國主義と稱す。其間民に勸告するに神に従順なるべき旨を以てせし賢明の士輩出せり、人之れを預言者と稱す、之れを精しく釋明せば、演說者或は說法者の義なり。猶太の諸王中最も強大を極めたるものをダビデ王となす、詩篇王より始まると稱す、國民其の治下にありて頗る安寧なり。王歿し其子サロモ嗣く、サロモ王甚た廣智敏才なりと雖も、

奢侈を好み、驕逸に流る、創めて箴言を作ると稱す。サロモの後國分れてイスラエル、ユデヤの二邦となる。之れより以後漸次國勢沈淪、國力衰耗し、遂にイスラエル國民はアッシリヤに遷され、猶太國民はバビロンに遷さる。其後ち猶太人はヘルシヤ人の爲めに羈絆を離れて其の一部はパレスチナに復歸し、再ひイエルサレムの都府を新築し、殿堂を建立す。後ち羅馬人の畧する所となり之れに隸屬す、此の時羅馬の猶太人を待遇するに苛虐なる甚たし、而して國民は苛政、暴斂の下に苦しむ彌甚だしくして、神より派遣せらるる救世主(メッシヤス)を待望する益盛に一日恰も千秋の感をなせり、謂へらく、救世主出づれば國家の勢力を挽回して再び盛榮を極めしめん、而して其隆盛なると古ダビデ王の盛時に倍すべしと。夫れ此の救世主なる觀念は二三の預言者に於ても、亦た見る所なるが後ち此の救世主なる觀念と、苦痛を受くるエホバの僕なる

觀念と相合せり。蓋し舊約聖書に謂へるエホバの僕とは國民を云へるものなり、其の苦難に遭遇するは神の刑罰にして、謂へらく國民は其の祖先の罪惡の爲めに懲罰せらるゝと、故に又た代身（ミカヘリ）の苦難と云ふ。猶太人の救世主の來臨を渴望する大旱の雲霓を望むが如し、其の熱情最も高かりしは是れ耶蘇生誕の時代なりき。當時狂狷奇邁の士輩出し自ら「メッシアス」と稱し、希臘語に轉譯せば「クリストス」と謂ふ黨を集め、徒を招きしと雖も、忽ち羅馬政府の鎮滅する所となりたり。

耶蘇は實に此の紛々擾々たる世に生る、然れども皎々たる利劍を振て以て政治界の救世主と成らんとするにあらず、靈魂を濟度する精神界の救世主となれり。皆に猶太人の爲めのみにあらず、滿天下を罪に溺れたるに濟ひ、各人に靈魂の平和を與へ、救世主國を建設せんと欲せり、實に耶蘇は其の國民の救世主なる觀念を宗教道德的に完成せり。是れ一

意政治上の救世主思想に迷醉せる大多數の猶太人が耶蘇を救世主と認めざりし所以なり。

第一篇

基督教の原書

基督教信徒の取て以て其の宗教の源泉となすの書を聖書とす。之れを分ちて二大秩となす、舊約全書、及新約全書是なり。舊約全書は本と猶太人の聖書にして、猶太教の教理を藏む、而して基督教は猶太教より脱化したる者なるか故に之れを取て全聖書中の前半となせり。

第一章

舊約全書概説

舊約全書を分て、歴史の卷、歌頌の卷、預言者の卷の三大部とす

其一 歴史の卷

歴史の巻は猶太人民の來歴、史傳にして筆を紀元前大約百年に絶つ、開卷は宇宙萬有の創造と、大始の人間の事を記するに古ヘブロー人の傳説する所を以てす。其初めの五書冠らすにモゼスの名を以てすと雖も、其著述とは云ふべからず、ヨズア、士師、サムエルの諸書の如く、其書中の主人物によりて其の書の名稱とせしのみ。

一 創世記

創世記の記する所空漠なる者多く、恰も古の寓言に似たり。曰く、天地の創造、アダム、エファの生活、其の樂園を放たると、人間の罪業の疊積、神大雨を降して人生を責罰すると、ノア救を受くると、イスラエル人民の祖アブラハム、カルデヤ國を出で、パレスチナ別名カナアン國へ入ると、其二子イサク、イスマエル、二孫エサウ、ヤコブの顛末、殊にヤコブ十二子の事を詳にし、十二子中殊にヨセフの事を最も詳説せり。蓋しヤコブに十二子あり、ヨセフは其第十一子に當り、篤信の人

なり、然れども其の兄弟、父の之れを殊寵するを嫉妬し、其の販る所となりて埃及に奴隸たり、不幸却て不幸ならず、福禍轉た糾繩に似て、端なく立身揚名の地を作り、埃及王の宰となり、後茲に父及兄弟を迎ふ、父此の地に歿す。ヤコブ亦たアブラハム、イサクと共にイスラエル人民の宗祖と稱す。イスラエル人又一に猶太人と稱す、ヤコブの第二子ユイダと謂ふを以てなり。ヤコブの末子はベシヤミンと稱す、ベシヤミン族の祖なり。蓋しエフライムとマナッセルを除くの外イスラエルの十二支族は各命するにヤコブの諸子の名を以てせり。以上はモイゼの書第一卷に載する所の大概にして、創世の記に始り、ヨセフの死に終る。

二 出埃及記

出埃及記は創世記に次ぎてイスラエル人民の歴史を載せり、即ちイスラエルの族、埃及に勃興し勢力を得、埃及王其の大事をなさんとを恐れ、壓制、虐役至らざる所なく、以て自滅せしめんとを

謀る、爰に於てモイセ其の同胞アィロンと相謀り、イスラエル人を率て夜竊かに出奔し、途に江海を踏み、亞刺比亞沙漠に轉頓し、終にカナアン國の境上に到着す。途上シナイ山に登り、民に布くに十章の聖戒を以てす、是れ猶太宗教の大本なり。モイセは未だカナアン國に入らず、チホー山上に殂す、山は國の南東境に在り。

三 利未記 利未記の載する所は主として幕屋殿堂に於ける拜神の法式、法規、祭司に關する法律とす。此の卷稱して利未記と云ふ所以は堂守の人を利未と稱するを以てなり。

四 民數記畧 主として人民の統計を示すか故に此の名あり。
五 申命記 申命記の載する所は、前諸書の要義を反覆したるに過ぎず。

以上五卷は是れ所謂モイセの五書にして、其の載録する所は鴻荒たる

創世の時代より猶太國建立に至る。

六 約書亞書 舊約の第六卷をヨズア書と稱す、書中ヨズア民を將てパンスチナを掠略し、國を十二支族に分割するとを記す、ヨズアとはモイセに嗣ぎて民を統督せし人なり。

七 士師記 第七卷を士師記となす。記録に曰く、國民の各支族個々獨立し、相結托する所なしと。一支族或は二三支族を統治するもの之れを士師と稱す。國民斯く其の團結を失し、各支族孤立するや、國力亦た爲めに疲弊衰微し、信仰振はず、遂に無道無神の域に沈淪せんとせり。實に士師の時代は凶險戰を好み、暴威世を制し、士師と云ふと雖も必ずしも篤信仁義の士にあらず、暴虐無謀のもの少しとせざるなり。

八 路得記 路得記は一小短篇なり、書中路得なる者が善く繼母に事へて孝節なる狀を叙じ、人をして坐に靄然たる和氣を掬せしむ。

九十、撒母耳前後書

撒母耳書は士師政治の末葉を叙し、又たサウル王とダビデ王の爲政を叙するの史なり。書中又たサムエルなるものゝ事を記す。サムエルとは最後の士師にして、モーセ以來最始の預言者なり。サウルは再び十二支族を合従し之れを統一したり、蓋し國民累代の干戈に疲れ、塗炭の苦を嘗め、遂に十二支族の合従、中央集權の一日も欠くべからざることを曉知し、サムエルに乞ふに國王を撰立せんとを以てせり。サムエル心甚だ悦ばずと雖も國民の切望遂に黙々に附するを得ず。サウルを推し立て、王となせり、是れイスラエル國に王あるの濫觴なり。後ちサウル年老ひ、精神亂れ、民を虐す。サムエル更にダビデを立て、王とす。ダビデは本と鄙邑の小民、野に羊を牧するを以て業となせし者と雖も、頗る篤信、聖明の人なり。既に嗣て王となるや都をエルサレムに移し、銳意政に勵みしを以て、國力富強、下民澤に浴す。猶太國

前後未曾有の盛時と稱す。故に後世に至りても國民常に當時を追慕して止まず。救世主はダビデの裔より出でんと云へり。

十一、十二 列王記略上下

列王記略は前卷を續て、以後諸王の事を記する歴史なり。先づダビデの嗣サロモ王の事を載す。サロモ王性として華侈を好み、重税を課せしを以て、民大に王を怨苦し、其子レハベアム嗣立するに及んで、國民賦歛を輕減せんことを哀願しけれども、王頑として之れを可かざりしなり。爰に於て十支族は王に離畔し、獨立の一王國を建つ。之れをイスラエル國と稱し、其の首都をサマリアとなす。而して唯だ南方の二支族ユダ、ベニヤミンのみレハベアム王に服屬す。之れを猶太國と稱し、其首都をエルサレムとなす。是れ南北二王國あるの初めにして、爾後南北兩國常に相反目、敵視し、間干戈を交へて激戦し、民益疲弊し、其宗教心彌寒燥となり、罪業日に盛なり。遂に紀元前七百廿

二年に至り、十支族王國はアッシリア國の爲めに掠略せられ、且つ國民は虜囚とせられて遠くアッシリア國に移植せらる。此時北國亡滅す。二支族王國猶太も亦た紀元前六世紀に於て、バビロニア國の爲めに侵奪せられ、國民はバビロン四虜に致さる。

十三、十四 歴代誌略上下 此の二卷恐らく紀元前三百年の頃に始めて成りしものならん、其載する所多くは前舉、數史書の抜鈔に過ぎず。著者の著眼點は著者の時代に於て行はるゝ祭司と、レビ人の禮拜は、既に上古より慣習となり、存在せしとを證明せんとするにあり。

十五、十六 以上喇書 尼希米亞書 以上喇書の大半は以上喇尼希米亞書の大半は尼希米亞の自著なり、抑五百三十八年以來バビロンの虜囚となりし猶太人は歸國の恩命を得たるものなるが、此の兩書は猶太人の一部が免れて再び祖先の地に歸り、再びバレンスチナに群集

し、聖都イエルサレムと聖殿とを再建するとを述べたり。

十七 以上帖書 以上帖書は大約紀元前二百年の頃に著述せられしものにして、猶太の一婦人以上帖の說話に因り、「フリーム」祭の由來を説明せんと試むるものなり、而して此書は狹隘鎖國的精神を以て著はされたるものなりと雖も、宗教的の價値に至りては決して僅少なりと云ふべからざるものあり。

其二 預言者ノ卷

預言者とは元と告者、說者なる釋義ある者にして、猶太人に於ては、神の親任を受け、國民に神意を宣傳する者を云ふ。則ち國民の顧問者にして、或は著書を以て、或は辯舌を以て、國民を諫告し、教導し、諷刺し、懲戒せしものなり。實に預言者とは民間にありて運動を爲す、宗教的或は政治的演說者にてありき。其の著書あるに至りたるは紀元前八世紀を以て始

めとなす。預言者に所謂大預言者なるもの四、所謂小預言者なるもの十二あり、其大預言者と云ふ所以のものは其著書大なればなり、曰く以賽亞、耶利米、ヤサヤ、ヤルムヤ亞以西結、但以理是れなり。

抑も預言者の盛時は恰もアッシリア人が北王國を掠略せしの際にして、此の時に當り、南王國には最も有力にして最も靈新なるアモス、ホセア、イェサヤ、ミハの如きもの輩出せり。下てバビロニア人がイエルサレム城を攻撃陥夷せし時に當ては、預言者イェレミヤ、イェチエヒエル大に力を奮て民間に奔走し、國民か囚虜となりて異域に移さるゝや、力めて國人に勸告するに、父母の宗教に忠實にして、偶像の迷妄に誘導し去られざらんと、慰藉するに歸國の期遠からざるを以てせり、其れ然り預言者は國民の精英にして善良なる道德宗教的思想の保維者なり。預

言者ハガイ、ザハルヤ、マナセの如きは思ふに南王國猶太復興の後、輩出せし者なるべし。

預言者ダニエルの奇書はバビロンの囚虜となりて其の國に致され、後バビロンとペルシヤの朝廷に歴仕して榮爵を得たる猶太の一少年ダニエルの歴史を載すものなり。後半はヘブライ語を以て記し、前半はカルデア語を用ゆ。其の著述は紀元前百六十五年にあり、故にバビロン虜囚を去る遠く數百年の後、恰も猶太人がソリア王アンチヨフース、エピファネス Antiochus Epiphanes の窘迫に苦められ、加ふるに祖先の信仰を放擲せんとを強ひられし時にあり、奮固と偶言の書にして、何人の著書なるや詳ならずと雖も、言を往昔に藉り確固不拔の信仰磐として泰山の如き、ダニエルなる者を寫し出し、以て當時の人心を墮落に救濟せんと欲したるものなり。

其三 詩歌の卷

此の諸書、外装は則ち詩賦にして、神髓は則ち道德宗教的の教旨を述ぶるものなり。

約百記 約百記は元と詩賦にして、篤信の人約百の命運を借り、其の牛羊は斃れ、財貨は亡び、家眷は死し、遂に身亦健全を保つ能はずして病魔の爲めに四肢の自在を失ひし事を叙し、篤信者の不幸と神の正義とは如何にせば調和するを得るやの大問題に答ふるを大眼目となす、而して遂に神の意志は底知れぬ海の如く、深遠無量にして凡夫の料知するを得ざるものなれば、宜しく謙遜して神意に服従すべきことを勸告す。

詩篇 詩篇はイスラエル人の宗教的詠歌にして、往昔は神拜式に際し、絃聲に和して唱謠せられしものなり。歌の篇數百五十となす。首めて

此の詠歌を作せしはダビデにして、篇中載する所の詩歌此の時代になりし者よりバビロン囚虜後になりしものに至る。或は優美、敬虔、篤信の自然吟咏、悲訴、悔改の歌あり、或は謝恩、愛國、凱戦の歌あり、或は復讐を欲するの情を寫したるの歌あり、然れども皆な千種萬様の情態に於ける猶太主義の發表なり。

サロモの箴言 此の書サロモの名を冠する所以は、サロモ始めて處世の格言を作りしを以てなり。箴言は則ち魔神、亂心を諫め、人世生路の要訣、經驗の實を述ふるものなり。

サロモ傳道の書 此の書元來傳道するもの、即ち傳道する智識と名けられたるものにして、真にサロモの著述に成りし書にあらず。記述する所は是れ百事、百物、皆悉く忽焉として出て、忽焉として没し、物一として肅殺せられざるはなく、世は空々、虚々、大虚無なりと咏唱す。バビロ

ソ四冊後の著作なり。

サロモの雅歌 此の書亦たサロモの名を冠すと雖も、其の著述と云ふにあらざ、唯た卷中の主人公たるの故を以て特に之れを名づくるのみ。古來此の書を以て宗教的の書なりと信じたりと雖ども、甚た誤謬なり、其の詠する所は人事世態にして、實に詩は牧婦スラミートがサロモの誑誘しきりなるに屈せず、能く忠誠篤實の節操高きを稱揚したるものなり。猶太人が此の書を其の聖書中に編入せし所以は、詩中大に宗教思想を形容比喩體に記す所ありと誤認せしか故なり。

舊約聖書中の「カノンの書に屬せざる外に、尙未だ日本譯とならざる、アポクリーフ」と稱ふる數書あり。此の書の大半は、ヘブライ語にて記載せられたるものにあらざ、希臘語を用ゆ。猶太の末葉に及んで著述せられ

たるものなりと雖も、著者を詳にせず、而して此の數書は著述の新たなると、宗教的價值僅少なりとせられしが爲めに、舊約聖書の附録として此れに編入せられ、且つ神拜式に當りて用ひらるゝとなかりしなり。名づけて「アポクリーフ」即ち「隠れたる書」と呼ばるゝも亦た是に起因せり。其著るしきは「ユーヂット書」サロモの知識、「トビアス書」パールツフ書、マツカヘ上下書是れなり。

第二章

新約聖書概説

基督教の教理を釋き、基督畢生の記録を傳へ、附するに使徒の行爲を以てするものは新約聖書是れなり。新約の諸書多くは基督の死後、大凡五十年乃至百五十年の間に編成著述せられしものにして、其間年を経ると大約百年の差あり。

其二 歴史の巻

二十四

開卷先つ四福音書あり、四福音書は皆な耶蘇基督の一代の言行を記載す。マタイ・マクケリヤン(福音)とは即ち希臘語にして、喜びの音耗音耗の義なり。初めの三福音書(馬太・馬可・路加)は記事、文章、較々符節を合すが如し、故に約稱して、シノプチックと云ふ言は共觀の義なり。

傳へて吾人に至りたるの諸書中、耶蘇の親ら筆を下したるもの一もあ
るなし。耶蘇の歿後、凡そ百五十年に至る迄は口傳を主とない、記録の如
きも日を積み、年を逐ひ漸く成りたりとは、雖も其目的とする所は單に
信仰を養ふにありて、耶蘇の歴史を後世に傳へんと欲するが如き志望
ありしにあらざり。又た其の書と雖も元と官書の如き威權ありしにあら
ず、且福音書の如きに至りても、吾人の所謂四福音書のみ存在せしにあら
らず、尙ほ其他に多くの福音書存在せり。又た我四福音書は最舊古の書

なりとも云ふべからず。我四福音書の如きは卷中の價值甚た高き故
を以て、年を加ふるに従ひ、人益之れを尊重するに至り、之れが爲めに復
た新約聖書蒐成の時に遭ふて、其卷首に編入せられたり、爾餘の福音書
に至りては或は亡ひて傳らず、或は尙ほ存するものありと雖も、其の記
事の奇異、妄誕極まりなき、其の宗教的の見識、觀念の賤劣なる、蓋し新約
聖書中に編入せられざりしは大に其の任に適ふと謂ふべきなり。

抑も我福音書が福音書と命名せられたるの嚆矢は、第二世紀の末葉に
在り、而して四福音書は其の著者として署名せられたる人の眞著述に
成る者一もなく、題名は馬太傳、路加傳等と譯すと雖も、是れ適譯と云ふ
べからず、寧ろ譯して、馬太氏等に據るの福音書と謂ふを可とす。蓋し馬
太等諸氏の名を以て、其の書に冠する所以のものは、福音書編述の時に
當り、編述者が取て以て原本となし、基礎とせし書の著者は誰なるやを

二十五

示すか、然らざれば、編述者が其の福音書を著作するに當り、何氏の精神を旨とし之を祖述したるやを示すに過ぎず。共觀三福音書は大凡紀元後七十年乃至百年の間に成りしものにして、其の資料たる耶蘇の言行、其の歴史的なるもの、或は比喩、諷刺的なるもの、皆な口碑に傳説せられたる所のものを以て、根據となせり。然り而して各記者は各特種の見識ありて各立脚地を異にす、故に其の記述する所自ら差異あるは固より勢の然らしむる所なり。

弟子馬太は早く既に耶蘇の家語を記識したりと云ふ、此の最古の記録より今日の馬太傳に轉載せられしものあるならん、我馬太傳は頗る猶太基督教の性質を負ふ、傳中耶蘇はアラハムの後裔にして、猶太教を墨守し、其の律法、風習の如き取て失はずと云ひ、又た耶蘇は即ち舊約聖書中に契約せられたる救世主なることを辨明せんとして汲々たるが

如き、或は馬太福音書中に舊約聖書を引照するの夥多なる、皆素因する所あるなり。

馬可傳 はイェルサレム顛覆の後、紀元後七十年、羅馬に於て成るの書にして、福音書中最古のもので云ふべし、而して此書の主義とし執る所は實に異邦基督教派、換言せば使徒ポロの黨派に屬す、蓋しペテロ及び爾餘の使徒等は猶太教より基督教に轉ぜし多くの基督信徒と共に、猶太基督教派に屬せり。猶太基督教派とは舊約の法規、律例は基督信徒たるもの、其以前猶太教徒たりと否とに拘らず、全部若しくは一部を循奉するを要すと固執するものなり、然るに異邦基督教派は之れに反し、受洗者は猶太の法規、律令を株守するを要せずとなし、全く之れを放棄す。馬可傳の記事は甚だ簡約明潔にして、耶蘇誕生時の奇怪を述べず、幼時の史を載せず、直ちに筆をパナテスマのヨハネに起せり。

紀元後八十年より百年に至るの間に於て羅馬に路加の名を以て其の書に冠するの福音書出でたり、其の編纂者は兎に角ポロ派の人に屬し、異邦基督教徒なり。其耶蘇祖先の系統を列叙するや、第一福音書馬太傳の如く、猶太人の祖先アブラハムを首とせず、遠く溯てアダムを首とし、耶蘇の計畫經營する所は滿天下の人の爲なることを喩々し、耶蘇は好んでよくサマリヤ人、異邦人と交りしを擧げ、許多の比喩は異邦人も亦た救世主の國に入るを得ることを説けり。

使徒行傳 亦た之れと同一者の筆に成り、恰も路加福音書の第二篇をなす。書中特にベテロポロ二使徒の事を誌し、猶太基督教者と異邦基督教者との間には鬩牆の争なく、和親ありしとを開表するを以て主眼目となす。故に使徒行傳の記事はポロ諸書翰の記事に矛盾し、ベテロポロの關係は甚だ平穩なりしとを記す。全傳中歴史的に最も信憑

し得べく、價值あるの文字は、ポロに覇旅に従ひし者の日記より轉入せし斷片なり。文中特に「吾等なる復數一人稱の語を用ゆ、恐くは路加の手記より出づるものならん、即ち十六章十一—十七、廿章五—十五、廿一章一—十八、廿七章一—四十四、廿八章一—十六是れなり。

福音書中最も晩成の者を約翰傳となす。紀元後百五十年以前に當りて此の書あるを稱ふる者なし。約翰傳は思想深玄にして希臘哲學に通ずる基督教徒の編著する所に成り、既にポロ派ベテロ派衝突の以外に立てり。又た著者は猶太神學、希臘哲學の折衷哲學者アンキサンドリア府なるフィロの流を掬み、其用語を用ゆ。假之、ロゴス即ち言葉なる意義の如し、ロゴスなる意義は既に早く希臘哲學の用ひし所に於て、神人間の中保者にして自ら神性なる者を云ふなり。由是觀之、約翰福音書は耶蘇の歴史と教訓に關する、單純一様の記録に非ず、耶蘇の言行に關

する編著者獨特の意見を載せしものと云ふべし。約翰福音書中において基督は人間形なる神とせらる。

其二 文書の卷

新約聖書の第二部を成す者、之れを文書となす、使徒若くは其の門弟の筆に成るものにして、之れを受取りたる者は教會、或は一個人とす。使徒ポロの書翰にして重要なる者を羅馬書、哥林多書、加拉太書となす。羅馬書はポロが哥林多に滞在せし時、五十八年と五十九年の間の冬に當て草じ、羅馬に起りたる基督教會に贈りし書なり。書中ポロの執れる主義を論述して甚だ盡せり、而して其の所論を聽くにポロ大に人の基督教徒たらんが爲めには猶太人に伍し、モゼスの律法を守るを必用とせず、耶蘇を信するの一事、能く基督教徒たらしむるを以て信徒たるには異邦人或は猶太人の區別毫頭もあるとなきを辨論す。

ポロが其の曾て自ら創立せし、哥林多教會に寄せし書翰、今尙ほ二篇を遺せり、我哥林多前後書是なり、前書は五十八年の春に、後書は同年の秋に草せし所なり。其の主眼とする所は教會内に於ける黨派の紛擾を戒訓し、基督教の自由を誤解し、異宗の輕佻より生したる不徳を諫告するにあり、又た愛養、舌言、基督並に基督教徒の復活に關する二三の質義に答へり。後書に於ては哥林多にても亦猶太基督教派の者ありて、大にポロに反對し、其の使徒の位を蹂躪せんとする者あるを以て之に對し、己のが使徒の品位を辨明せり。

加拉太書 はポロの四大書翰中、成るの日最も早きものにして、紀元後五十六年か、然からざれば五十七年になれり、此の書翰はポロが加拉太の基督教徒ポロの異邦基督教主義を離れ、傾頽して猶太基督教説に流るゝの勢あるを見、慨然として筆を執りしものなり、故に語氣

甚た昂然たり、ポロ大に其の異邦基督教を辨明し、特に此の事件に關しては、初めより十二使徒に對し、確然自個の位置を硬固にし、加之其の同意、即ち此の事に關しては互に相忍容するの契約を爲せしとあるを明言せり。

以上四書の外尙ほポロの名を署するもの九篇あり、然れども其の内には、或はポロの手に成りしを信せしむるに近きものあり、或は甚だ疑ふべきものあり、或は全く眞にポロの著となすべきものあり。

以弗所書、哥羅西書 此の兩書は相肖似すると甚だし、書中要領とする所は、基督教會を論するに復活したる主の身體に比し、耶蘇は人間以外の者なりと大聲疾呼し、又た信徒を鼓舞して、敵と戰ふて勇猛ならんとを勸告するにあり、然れども此書果して眞にポロの著す所なるや否やは、今日の神學尙ほ之を斷言する能はず、書中彼此言、眞にポロ

の手より出でたるものあるならん。

腓立比書 此の書は多分ポロが囚虜となり、羅馬の獄に在るの日（紀元後六十二年乃至六十四年）草せし所にして、惠賜の贈與を謝し、命運究り囚死の免かるべからざるを云ひ、困難の裡に處し、綽々として天命に安ずることを記せり。

帖撒羅尼迦前書 は恐らく紀元後五十四年の頃、既にポロの著せし所のものにして、テッサロニカ教會の内に起りし疑問、耶蘇再來の事を論せり、蓋し信徒は耶蘇再來の接近せるを信じ、多くは日業を修めず、大に攪擾を醸せしを以てなり。

帖撒羅尼迦後書 は輒今學術の研究、考證する所に據るに、多分使徒時代以後に至り始めて著述せられしものなり、亦た耶蘇再來に就き説をなす。

提摩太前後書並に提多書 皆な亦た使徒時代の作なり、其の記する所は、教理の醇粹を害せざらんとを切望し、監督たる者の義務を述べたり、而して其論述する所を見るに二世紀に至り始めて成立せし、教會の法憲及び關係に因り立論するもの少なしとせず。

腓利門書 はポロガエロッセの某信徒に贈りし書の以て、書中某の奴隸チチシモの脱走を赦し、再び納れて寛待せんことを請へり。

之れに次くの七篇を所謂、**普及文書** (Die Katholischen Briefe) となす。蓋し斯く名稱する所以のものは約翰第二、第三書を除くの外は、悉く一般基督教徒の閱覽に供せし文書にして、敢て某教會或は某信徒に贈りしもの文書に非らざればなり。此の諸書は思ふに使徒時代の後著述せられしものならん。記する所は勸告の言、徳義の訓なりと雖も、ポロの深

遠の精神を去ると遠き通俗昧の書なり。

彼得前書 亦た基督教を以て、猶太教の完成具備したるものとす。然れどもポロの教旨を論するや、頗る温和且つ異邦基督教派と猶太基督教派の調和を冀望するものなり。此の書の成るは凡そ紀元後百年の頃にあり。

彼得後書 は漸く紀元後百五十年の頃に著述せられし書なり。此書基督教徒が一世紀の頃、大に待望し其の自ら之れを見るべしと信ぜし基督の再來は何に因て斯くも永く引順せしやの疑問を解釋せんと試む。

雅各書 は猶太基督教主義を執るものなりと雖も、甚だ温和にして極端説を固持せず、此の書耶蘇の同胞ヤコフ(使徒行傳十五章十三、十四、廿一章十八、十九、加拉太書二章九)の著述する所なるや否や未だ詳なら

ず、其説基督教を以て完備の律法となし、立言ポロの教旨たる、救済を得るは唯だ一に信仰に由るものにして、善業に由るにあらざるの論を駁撃し、特に善業の重すべきことを力言せり。

約翰三書 第一書は則ち三書中最も秀逸なるものにして、其思想、言語は第四福音書より出でたり。三書皆異邦猶太基督教派間の紛擾後に成り、毫も其餘波を見ず、揚言して曰く、基督教とは神の人に於けるの愛人の神に於けるの愛及び人の其の同胞に於けるの愛なりと。

猶太書 は紀元後百五十年より以前に現れたるものにあらず、書中使徒の事を記して已に遠く世を去りしものとなし、又た其の勸告、忠諫する所は神聖なる遺言なるを以て、人常に之れを記憶せざるべからずと論せり、又た大に二世紀の頃に當りて漸次擴張せし、半ば基督教的にして、半ば異宗教的なるグノーチスの哲學的神秘教を排斥せり。

抑も諸書多くは眞の編著者の名を掲げず、單に之に冠らすに大使徒の名を用ひたると既に前陳の如きものあり、然れども見る者須らく驚愕せざるを要す、如此は是れ當代の常習にして、人或は大家の説を祖述し、其精神に因て編著する所ありたらんには、編者自ら其名を署せず、先哲の名を署するもの多し。

希伯來書 は第一世紀の末葉に於て著述せられしものにして、希臘の文學に涵され、ポロの教旨を奉する一信徒の猶太基督教信徒に贈りし文書なり。此書基督教の猶太教に勝越すると、換言せば新約の舊約に勝るとを陳べ、之れか區分の由て來る所は、其中保者にある者にして、舊約に於ては、天使中保者たれども、新約に於ては、基督中保者たるを論じ、又た彼れに契約する所と其の結果と、此れに契約する所と其の結果

との間には甚だ徑庭する所ありと述べ、大に信仰を疆固にし、迫害に遭
遇するも能く志を守るべきことを勸告獎勵せり、此書後ち稱してポロ
の著す所なりと稱すと雖も頗る誤れり。

約翰默示錄

羅馬帝チロイ暴虐無道、殘忍甚だしく、血を流し人を

殺す其數を知らず、悲慘を極む、因てイエルサレム城陷沒(紀元後七十年)
の前即ち凡そ六十八年の頃、七都會の教會に寄せたる回文牒の一書現
はる、之れを約翰默示錄となす。著者は果して何人なるや今詳ならずと
雖も、甚だ熱心なる猶太基督教者たるに疑ふべきにあらず。書中擧ぐる
所の畫像的形容多くはダニエル書より轉化し來るものにして、皆な基
督の再來及び之れと相連絡せる世の終末、チロイの反基督教事業の滅
燼(六百六十六なる數は「帝チロイ」と解すべきものならん)并に千年國の
初期を云ふものあり。

總て此れ等新約全書の諸書は皆な第四世紀の末年に於て始めて、カノ
ン即ち基督教の信仰の標準なりと裁定せらる、初め基督教々會の爲め
に神聖なりと認定せられたるの書は猶太教の書、舊約聖書のみなりし
に、更に基督教の書を加へたり、爰に於て猶太教の書は則ち舊約の書と
稱せらる。之れを羅句語に Testamentum と呼ぶ所以のものは、イスラエル
人民と神との約束は一種の契約と做れりしが故なり。基督教の書之れ
を新約の書と稱す、兩書元と舊約の書或は新約の書と稱すべきものな
るも畧して舊約、新約と稱す、其簡を求むるが爲めなり、其兩約を總稱し
て Biblia と云ひ、統一の書とせらるゝに至りしは後世の事にして、第四
世紀の末葉に至る迄は新約の諸書中尙未だ權威を有せず、眞書とせら
れざりしもの少なしとせず。

以上は是れ聖書は何物なるやを概論せしものなるが、余は更に進んで

聖書の價值如何を論ぜんと欲す。

第三章

聖書の價值

夫れ聖書は萬宗教に於ける經典中に在て最も卓絶したるものにして、
道德のとより之れを考ふるも、又た宗教のとより之れを考ふるも、共に
最も純粹深玄の書と云ふべきなり。此の書や實に信仰を厚ふし、敬虔の
生活を送らんとする者の爲めに徳に進むの先導者と云ふべし。百誘襲
ひ來り萬難身に迫り友の相議るべきなく、力の頼むべきなきの時に當
り能く其の顧問者となり、忠諫者となり、慰藉者となり、補助者となるも
の、其れ聖書にあり然り而して、聖書を讀む者は何を目的として之れを
讀むか、其の目的となす所は學術の書を讀むか如く、智囊を富ましむる
爲めに非らざるべく、又た小説を讀むが如く、閑散の爲めにも非らざる

べし、人の之を愛讀する所以のものは、讀て而して其心に得る所あらん
とを欲し、其の道德宗教的品性を涵養せんとを冀ひ、彌々善良に益々敬
虔厚信に至らんとを求むるを以てなり。故に旨意に通ずる宜しく紙背
に透徹せざるべからずと雖も、之れを通讀して細大洩す所なく、創世記
の第一葉より黙示録の最終アーメンに至るまで、悉く讀み盡すを要せ
ず、宜しく撰擇する所ありて可なり。若し人正心誠意之れを繙讀せば其
の甚だ不適當の章にあらざるよりは、讀む所必ず讀者の心靈の糧とな
らんと豫め期望すべきなり、知るべし聖書の價值のある所其の敬重す
べき所以のものは、實際の道德宗教に關する點に存するを。
其れ然り、眞に聖書を讀む者は徒らに訓話を事とせず、猥りに文字に荷
泥せず、其文句中更に宗教の玄妙を穿ち、其の奧義に通すべし、故に或は
通常の讀者が閱して以て價值なしとなし、或は見て奇怪の談以て其の

智識の承認する所に非らずとなす所のものと雖ども、無限の妙理あるとを悟了すべし。乞ふ試に之を論せん。傳に曰く、耶蘇二尾の魚、五個のパンを用て、能く四千人に食ましめ、一人の飽かざるものなかりしと、若し人單に此の文字を讀み、文字を解するのみに止まらんか、是れ實に咄々怪事、凡々たる魔術者流の行に過ぎざとせんのみ、然れども文字のみを解する者は、未だ以て眞に能く書を讀むものと云ふべからず、能く書を讀む者は、其見須く紙背に透るを要す、彼の所謂食物とは何ぞ、是れ人の精神の食たる福音にあらずして何をか云はんや、福音は能く萬人の心の糧となり、之を食ふ者をして満ち足らしむべく、幾千萬の人之れを食ふと雖も毫末も損耗する所なきなり。されば此の一見甚だ恐なるの記事も、能く讀み來れば心に饑餓を覺へ、飽かんとを冀望するの人に向て、道德に進み、信仰を厚ふするの鞭となるや必せり。蓋し聖書の目的は學

理を教へんと欲するものにあらず、讀者をして其の心を端整敬虔ならしめ、心情を優美、高尚ならしめ、行爲を慎嚴、謹肅ならしむるにあり。故に苟くも聖書を讀むの人は、端坐之れに向ひ、慎謹の念を以て之れを誦し、讀誦する所は必ず之れを我内心に鑑省し、已れ足らざる所あれば之れを補ふとに志さざるべからず、是れ聖書を讀むの法なり。嘗てルイテルが隣家の一婦、主の祈を念ずるに一週間を費し、一日一句の念願を稱へ、全日深く此の意を思考玩味せしが、ルイテルの之を稱して眞正の基督信徒と云ひしも亦た宜なりと云ふべし。

夫れ日本には古來、毎朝其の居宅を掃除、洗滌するの風習あり、居宅已に毎朝之れを清潔にするを務む、人の靈魂の尊き焉ぞ居宅の比ならんや、人宜しく亦た連朝聖書を讀誦し、其の靈魂の清潔を計り、洗滌する所あるべきなり、余又た日本の商人を見るに、毎夕其日の損益する所を計算

するの風習あり、基督信徒たるもの亦た宜しく接夕寢室に入るに先ち、聖書を繙き、其の日の道德宗教のことに於て損益する所如何を考へ、若し損する所あれば之れを悔ひ、之れを改め、若し得る所あれば益之れを固持せんとを慮り、心に盟ふ所あるべきなり。

聖書載する所、通常人の爲めに解し易きもの多しと雖も、又た解し難きもの固より少しとせず、爰に於て聖書中には解し難きもの多くありとの故を以て、聖書を讀むを好まず、之れを抛棄するものあらば如何、此の者は果して適當の行を爲せしか。夫れ連城の玉も埋れて瓦石の中にあるれば、人能く之れを識るなし、然れども彼れ瓦石の中にあるの故を以て抛棄せられざるへからざるか、余は之れを携ふるの卡和を待つものなり。琢磨或は大に筋力を勞せん、然れども若しよく之れを切磋せば、明晃耀々たるを見ん、彼の奇蹟談を讀むものは、心して、其多くは宗教道德的

眞理の奧義を形容比喻して云ひしものなるとに注意するを要す。耶蘇盲者の眼を開き、明を得せしめたりとの談の如き、耶蘇は罪人の心の眼を開き、罪を覺らしめ、精神の盲者をして明を得せしめたるを云ふと解すべきなり。又た耶蘇は死者を蘇生せしめたりとの談の如きも、耶蘇は道德宗教の心を消耗せし精神上の死者を甦し、再び善良の生活に移らしむとの意を述ふるものなり。然り而して新約聖書中の奇蹟談は何に因りて形成せられしやと云ふに、其主なる原因二あり、曰く信徒が教會中に相傳へたる口碑は、耶蘇の格言を轉化して眞の奇蹟となし、或は病人殊に精神病患者を醫治せしとに附會して奇蹟談を作りしと、是れ第一なり。古代の基督教會は耶蘇の救世主、即ち「キリスト」たることを特に證明せんが爲めに、舊約聖書中の奇蹟談を模範となし、相類似せる奇蹟談を作りしと、是れ第二なり。其他復た處によりては、殊に約翰傳に於

ては——教理を粉飾するに奇蹟の服裝を以てし、後世之れを文字通りに解釋し以て眞の奇蹟談となすものあり。

加之、インスピラチオン説なるものあり、曰く聖書の文字は各字皆な悉く神が篤信の人を器械使して筆記せしめしものなりと。されども若し吾人、インスピラチオン説を解して、神の靈は甚だ外見的に聖書記者の手を取りて、其の書を筆記せしめし者に非ず、宗教道德に於ける書籍の著者は、常に多少神靈の力を受くるものなれば、聖書の著者も亦た神靈の力を得て、其書を著作せしものとせば、甚だ適當の論ならん。聖書亦た人の手に成るの書なり、故に書中瑕瑾と誤謬とあるを免れざるは、是れ實に數の止むべからざるものなり、今僅かに一例を毛舉せんに、創世記談の如き復た誰れか之れを今日の學理に矛盾する所なしとするを得んや。聖書復た稱して「神の語」と呼ばる、蓋し之れを著作せし人は神靈

の力を受けて正明となり、其鼓舞を感得し而して著作せし書は聖書なればなり。

第二篇

基督論

第一章

基督教の創立者

耶蘇後ち榮名を贈て基督と稱す、基督とは受膏者の義なり。猶太教及び羅馬希臘の異宗皆な擧て滅勢衰微するの時に當て降世せり、蓋し猶太教は古豫言者の時に於て其の隆盛を極め、發達して甚だ高度にあり、頗る力を有せしも、後は漸く力衰萎し、瑣末の技に流れ、典禮、清洗、犠牲、斷食、祈禱、施濟の宗教と化し去れり。異宗亦た其勢凋衰し、其群神を信仰するものなく、反て之れを嘲罵、冷笑し、滔々として瞬時の快樂に耽り、汝々と

して慾心を長し、浮雲の遊を事とせり。若し然らずして宗教心を涵養せんと欲する者あれば、妄信、迷信の中に僅に餘喘を保つのみなりし。嗚呼、羅馬は當時最も富強を極め、煥然たる外表の文明大に見るべきものあり、當時其最盛時と呼はるゝも敢て偶然にあらざるなり、然れども能く其實想を窺へば大に否なるものあり、蠹朽の器之れを覆ふに金銀寶石を以てすと雖も焉んぞ能く久しきに耐へんや、羅馬の國も其外面を窺へば極めて富強燦然として人目を眩すと雖も、裏面に入れば、徳本の力は衰滅し、神を敬し、心を安ずるの道を立てず、元氣を養ふ所以を知らず、春花、秋草、凋落して後ち、聳然群を出つるの松柏なし、故に羅馬國當時の實想は實に累卵の危に居り、浮雲の上に遊ぶの危殆に在り、恰かも宜し此の時に當り、東國王の出つるあり、身は元と貧賤に起り、其の父を工匠ヨセフとなし、其の母をマリアとなす、其地亦偏域、パレスチナの一小邦、

ガリラナの一小邑、ナザレンとなす、此の時、此の地實に世の救主降世せしなり。

(因に曰く、耶蘇降世の地をベツレヘムとなすは非なり、是れ耶蘇の救主たることを、舊約預言者の書にあり辨證せんが爲めの作事のみ)
 耶蘇年始めて三十、蹶然立て教を弘む、其の道たる斬新なり、其の門弟子等皆な謂へらく、是れ唯たに猶太人の渴望する所の者のみならず、又た古より已に業に豫言者の遺言して猶太の國力を挽回、復興する者出んと告げし救世主なりと、然れども是れ未だ耶蘇自家の心を得たるものにあらず、耶蘇は救主即ち、メッシアスなる名を襲用せりと雖も、其の救主なる觀念も、其の救主國と稱するものも、共に世人の如く政治的に或は外形的に解せしにあらず、神國とは全く道德宗教的に解すべきものなり、語に曰く、天國は遠きにあらず、曹等の裏にありと。

其の教ゆる所の大意を抽出せば、曰く、汝神を愛す可し、汝の隣人(萬人)を愛すると汝自個の如くなるべし」と云ふにあり(馬太傳廿二章三十七—四十)殊に光彩の燦然として能く基督の教旨を録せしものを、山上の垂訓となす、載せて馬太傳五、六、七章にあり。之れに次くものは譬喩にして、載せて馬太傳十三章、全十八章廿三—卅五、全廿章一—十六、全廿一章卅三—四十三、全廿五章一—十三、十四—卅、馬可傳四章廿六—卅、路加傳五章卅六—卅九、全十章廿五—卅七、全十三章六—九、全十四章十六—廿四、全十五章全十六章十九—卅一、全十八章九—十四にあり。要するに耶穌基督の教ゆる所を畧叙せば左の如し。

神は吾人の父にして、萬人は神の子なり、而して萬人互相は兄弟姉妹なり、故に全世界の人類は一大家族に等し、神は無量の慈愛心を以て萬人の父となり玉へば、吾人相互も亦た一大家族の兄弟姉妹の如く、互に自

我を捨て、飄然たる和氣の間に相交際じ、台蕩たる春風の裡に團欒せざるへからず。地上何の處と雖も、此の狀態の現れん處には、則ち天國(或は神の國)在るなり、故に基督の來りたるは神の國即ち天國を地上に普く來らしめんが爲めなり、固より天國の實に在る處は甚た稀有なりと雖も、吾人基督信徒の冀望し亦た理想する所は天國を全地に普及するにあり。

基督は自ら實に一猶太人なり、然れども猶太教に於て外形に流れたる所は能く之れを化して精神的となし、猶太教を改革大成せり、故に吾人は特に名けて基督の宗教を精神的宗教と云ふ。又基督は神と人間との關係を説ひて父の子に於けるが如く、子の父に於けるが如しと云へり、故に其福音を稱して神子宗教とも稱す。其倫理を教示するや曰く、人は言語、行爲に於てのみ罪惡を行ふにあらず、其の思考する所惡しけれ

ば之れ亦た罪惡なり、故に罪惡を鋤去せんと欲せば宜しく其の大本に遡り、其根を絶たさるべからずと、根とは則ち人の思考にあり、其信仰を謂ふや曰く、人間の最大福祉は神と相交通するの生活にあり、換言せば子の父に於けるか如く、神と人間と相共にするの生活にあり、是れ信仰の神髓なりと。又云ふあり曰く、萬人悉く罪人にして恰も放蕩息子（路加傳十五章十一—卅二）の如し、故に其罪を悔改し、信念を厚ふし、神の和に入らざるべからず、神は慈惠にして悔改の心ある人間を再び容れ、其罪を免すと彼の放蕩の子の父の如しと、故に基督は悔改の心ある者には神其の者の罪を免赦すと教示せしなり、基督固より教誨を垂れたり、然れども基督の爲せし所は單に口滔々として教を演べしのみにあらず、復た自ら能く之を躬行し、其の教ゆる所を實踐せり、基督は實に愛神愛人の純然たる模範なり、吾人は基督に於て徳の濃厚、性の純潔、信仰の深

玄、神と人との交通に原因する最大福祉を見るなり、謂つべし耶蘇基督は其の教訓せし所を躬行し、言行一致にして圓滿を得たりと、其の行ふ所は慈愛、憐恤、救濟、調和の業ならざるはなし、故に耶蘇一生の史を讀み、是れを其の經營、事業の間に東奔西走、汲々として勤め、日夜惰る所なく、枕する所だもあらざるの間に觀、且つ知るものは、唯だ其の偉人たるを嘆異するのみならず、又た必ず其の人と爲りを敬愛するの心勃然として生ぜん、吾人其の人となりを觀る、彌深ければ、其の我心に接する亦た益切ならずんばあらず。

固より耶蘇基督の事業たる一として愛の事業にあらざるものなしと雖も、其愛の事業の最大、最厚なるものは、從容自ら決して、十字架に就きしに過ぎたるものあらざるなり、初め耶蘇は道がリネヤに傳ふると僅に一年にして、約翰傳に由れば耶蘇の傳道は三年間なりと云ふ、後ち

猶太の國祭逾越節に望まんが爲め、イエルサレムに上り、遂にイエルサレムに於て、其敵猶太の神學者の爲めに計かられ、羅馬政府の城代ポンテオ、ピラトの允可を経て、十字架上に刑戮せらるゝに至りたり。抑も十字架の刑は當時、人の最も惡忌する所のものにして、大罪業の者にあらざるよりは十字架に刑戮せらるゝとなかりき。耶蘇基督純潔の心を抱く萬世に冠たり、而して此の詬辱に遭ふ豈に悲しからずや。時は惟れ金曜の日、恰も猶太の國風逾越の節を祝するの週に際す、天爲めに哭し、陰雲漠々空を覆ひ、地爲めに動き、驚震蕩々殿幕裂けたり。福音書史に相傳へて曰く、後ち三日即ち猶太の曆日を以てせば、安息日の翌日、我日曜日、早朝弟子復た復活せし主を觀たりと。

第二章

耶蘇基督の死

夫れ耶蘇の死は其の經營事業を全備ならしめしものにして、其の冠と謂ふべし。十字架上には耶蘇の心中にありて常に勃々として蓄積したる、身を殺して仁を爲すてふ不測の愛は、煌々として耀き、其の仁恤、忍耐、神の意志に服従するの心は、燦然として麗なり、其の死や敵の謀計に出で、敵の所業や衷心の姦惡に出づ、蓋し耶蘇の敵は人民多く、反て耶蘇に心服して己れに心服せざるを憤り、嫉妬の心を起し、不平の念は鬱積して遂に憎惡と變じ至大言ふに忍ひざるの惡業を爲すに至りしなり。彼等暗愚にして耶蘇を見るの明なく、國人の道德宗教的の需用を察する能はず、具眼にして盲し、獨り我慾を恣にせんとせり、遂に此れ等の罪惡は耶蘇基督の敵を驅て、紅血淋々たらしめり。故に吾人は謂ふことを得べし、耶蘇を十字架に釘せし者は罪惡なりと、然り而して吾人は嘗て耶蘇の敵の心中にあり、之れを驅りて耶蘇を磔殺せしめたる、惡むべく、恐る

べき罪惡は依然として尙ほ今日我胸中に在りて存するを覺知せざるべからず。若し夫れ吾人は自ら正義を得たりとなし、耶蘇基督を殺戮せし罪は、獨り耶蘇の敵にのみありとなさんか、之れ謬れるの甚だしきものと云ふべし、焉んぞ吾人にして彼の時代に生れ、彼の敵の地位にありしとせば、我行為此れに優れる所あるを知らんや、故に吾人は謙遜の心を以て、彼の「パリサイ人」^{Pharisee}、「サドカイ人」^{Sadducee}、學者の心にありし罪惡のみにあらず、一般人世に存する罪惡故に又た吾人の罪惡なる者は、基督を殺戮したるなりと告白せんと欲す、是れ即ち後世基督教會の教義に所謂、吾人の罪惡は、耶蘇を十字架に釘したりと稱ふる精神のある所なり。而して耶蘇を以てすれば、其の死は人間を愛するの赤心より出で、人世の爲に盡せし犠牲の死にして、是れ眞に其の自由の決意より生ぜしものなり。思ふに人間の身體或は精神の幸福を計り、反て身を殺せし者世多く

之れあるべしと雖も、耶蘇基督の自動的死の如きは、人世一般の爲め至大至高なる精神的、道德宗教的生活の福祉を得せしめんが爲めにしたるものにして、其死より出てたる恩澤、厚惠は千萬無量而して其の福音をして勝利を得せしめたる所以の力も亦た其の平生の言行より遙かに大なり。故に其の献身の死は、人生の多少の部分の爲めに幸福を計り、遂に死に至りたる者の犠牲の死の如きに非ず、之に勝る萬々なりと云べし。由是觀之十字架、即ち耶蘇基督の十字架の死は、一方にありては能く人生の消極的或は罪惡的性質を悉く照し出すものにして、恰も人生の闇黒世界をなすと雖も、一方にありては耶蘇基督に於て、能く人生の積極的性質を現し、德義、神聖の愛、献身の思想は悉く十字架に輻輳し來り、煥然として恰も人生の光明世界を成せり。故に吾人は耶蘇基督の十字架を消極的并に積極的表識シンボルと稱するを得べし。誰れか之れを仰で慨

然、自ら決する所なからざらんや、謂つ可し、耶蘇は人間をして道徳上の自由を得せしめ、罪惡の束縛を免れしむる眞理の爲めに死を致せしなりと。固より其の日夜奔走、刻苦し、枕する所なかりし所以のもの、皆な人世を救濟して迷路、不善、罪惡より脱出せしむる大勢力あるや、疑ふべきにあらずと雖も、其の事業たる、恰も其の死に因て完備し、能く其勢力をして強大當るべからざらしめたり、之れを以て吾人は其の死を稱して救濟の死と云ひ、耶蘇を稱して救主と云ふなり。其れ然り、耶蘇基督の死は、吾人をして、悚然とじて、人生至る處に存せざるなく、嘗て耶蘇基督を以て、慘憺たる死に陥らしめし原因なる罪惡を、嫌惡せしめ、ゴルガタ山上の仁人に對し、感謝に咽鳴し、愛心を奮起し、曠然として感激し、其の門弟となり、終生忠に背かざらんことを盟はしむ。

第二章

耶蘇基督の復活

時惟れ金曜日、恰も猶太の逾越の節日に際す、午後三時、耶蘇忽然として逝けり。後三日を経て日曜日の曉旦、耶蘇蘇生して其の墓穴を出て、門弟子に顯れたりとは其の弟子の確然たる信仰にして、又た其の恒に確證して宣傳する所なり。若し夫れ此の奇蹟の解釋に至りては、諸説紛々たりと雖も、耶蘇基督の門弟の信仰にして、確然不拔決して動かすべからざるもの一あり、曰く、吾人は主を見たりとの信仰是れなり、而して復活の解釋に諸説あり、之れを毫擧せば左の如し、

- 一、聖書の記事を文字通りに解釋す、
- 二、假死説を以て之れを解釋す、曰く、基督の墓穴中に埋葬せられし時は、未だ全く死せしにあらず、故に後再び蘇生して墓を出てしなりと、
- 三、幻像説、幻像とは幻像を見る者をして、其の思想を特に甚だしく動

かす人物の形を忽ち眼前に見、或は其人聲を聞くと思惟せしむるものなり。然れども其の實其の人物眼前にあるに非ず。或は音聲あるにあらざ。故に現象は原と容觀的ならず、興懐したる神經の動作により生ぜる妄想なり。此の説に従れば、基督は實際客觀的に現顯せるにあらざ。其門弟子の眼前に現顯せし者は幻像にして、門弟子は之れを客觀的と思惟せしなりと云ふ。

第四章

耶蘇基督復活の解義

耶蘇基督は復活したりとは基督教に於て、古來今後千載不磨の眞理なりとす。之を續釋せば曰く、耶蘇基督の人物を成せし精神的我、或は道德宗教的本體は決して彼の十字架上に磔殺せられて滅盡し去りたるにもあらず、寒冬の墓穴中に枯朽したりたるにもあらず、耶蘇基督の精神

たるや無盡の源泉、混々の水を噴出するが如く、其門弟子により世々に宣傳せられて、萬世絶へず、復た能く人心を收攬す。今日と雖も吾人は耶蘇基督の精神勃々として存し、一個人と國民との中に充滿するを感知せずんばあざざるなり。故に精神的に之れを言へば基督は決して死せしにあらず、復活したるなり。吾人各個の中に於ても基督即ち其精神其の本體は復活し活動して生命とならざるへからず。是れ耶蘇基督の復活が今日に於ける價值なりとす。若し夫れ耶蘇基督は復活せざりしとせんか、換言せば其の精神は勝利者たらざりしならんか、世は復た基督教なるものを知らざりしならん。故に耶蘇基督の復活は基督教の基礎たるものにして、今や吾人の中にも亦耶蘇を復活せしむべしと勸告して止まざるなり。其の昇天のとに至りても、亦た復活と同義を有するものに外ならず、舊古の記事に従れば二者を同時の事蹟となす。

事既に此の如し、耶蘇の復活に關し其の價值あるの點は其の身軀的方面にあるにわらず、其の精神的方面にあり。基督の復活は實に吾人の爲めに、道德宗教上の價值を有するものなり。

第五章

耶蘇の榮名

人、基督を稱して「神の子」と云ふ、蓋し基督に於て人靈と神靈と最も圓滿に結合したるを以てなり。吾人も亦た皆な耶蘇の希望せしが如く、神の子即ち耶蘇基督の模範に習ひ、神の靈を以て充たされたる人の子とならざるへからざるなり。夫れ基督は人なり、故に吾人彼に習ふを得べし。基督又た他の敬神家の如く、神靈的方面を有す、是れ神の人を充たすが故なり。又た人、基督を稱して「神の獨子」と云ふ、其の一種獨得なるを以てなり。人世の罪惡を醫治するを以て「治主ハイヴン」と稱し、人世を罪惡の束縛より

救濟するを以て「救世主」と稱し、罪惡ある人世を神に近づかしめ、神人間の調和を得せしむるを以て「調和者」或は「中保者」と稱す。

第三篇

基督教の發達

第一章

基督教の變遷一斑

始め基督教の猶太國に起るや、其境遇甚だ困難の地位に立てり。主基督の如き磔殺の詬辱を被り、嫌惡、迫害延て其門弟に及び、門弟等日一日も安堵する所を得ず。出で、羅馬國に在るや、帝を首として下民に至るまで復た基督信徒を惡み、迫害至らざる所なく、之れを殺戮して苛虐を極めたり。然りと雖も千萬の信徒は皮肉、劈裂せられ、體骨、粉碎せらるゝも、信仰を放擲するを欲せず、信心自若として磐石の如く、得て轉ずべから

ず、浩然として死に就けり。基督教は此の位地にありて可驚的長足の進歩をなし、後星霜を経る漸く三百年にして已に羅馬國民の大多數は基督教を信奉するに至り、遂に三百廿四年コンスタンチン大帝は基督教を擧げて國教となすに至りたり。爰に於て從來窘迫を受け、輕蔑、賤視せられたるの教會は一變して世を支配するの教會となれり。然れども一利一害は世間の多く免れ能はざる處、從來基督教に歸依するものは滿腔の精神を注て歸依し、純良にして確信不拔の徒なりしも、一朝基督教が國家の擧ぐる所となるに及でや、巧佞、阿諛、奸詐の徒妄りに信徒と稱し、加之數等の階級を分てる教役者(執事、長老、監督、大監督、大僧正、法主、Diakon, Presbyter, Bishop, Erzbischof, Cardinal, Papst)は次第に富貴を増し、放逸奢侈に流れ、俗權を弄するを好み、遂に羅馬の監督は教役者中最も權威ある者となり、「パパー」(パプスト)法主なる位名を得て、全教會の長と

なり、自ら神と耶蘇基督の代理者と稱せり。——而して東部羅馬帝國の教會即ち今日の希臘加特利基教會は、西國即ち羅馬加特利基教會と分裂するに至れり。其の原因たるや他に之れありと雖も、要するに羅馬の監督が法主と自稱し、コンスタンチノッポルの監督、及び小亞細亞教會を凌駕し、之れを支配せんとするより起りしなり、然り而して教役者の專政は年に増して彌堪ゆべからざるに至り、加ふるに彼等の不品行、粗野は日に盛に、加特利基教會は益々耶蘇基督の單純なる教旨と眞理とに遠かり、教法大會議の決議に由て成れる教義を聖書よりも尊重し、且つ多神教の妄信、偶像崇拜を多く、教會内に輸し、再び猶太教の律禮主義に流れ、人をして宗教とは儀式を守行するに外ならざるかと疑はしむるに至れり。爰に於て高德有識の士、驟然憤起して教會を改良し、古義單純の福音を復興せんとを勉めしも、時尙は早く多くは不幸にして死地

に陥り遂に十六世紀の二大宗教改革者(ルーテル及ひツヰンクリー)獨
乙と瑞西に起り始めて教會と信仰の改良を就くるを得たり。

第二章

「プロテスタント」教(新教)の本旨

「プロテスタント」教は則ち基督教が多神教偶像教并に猶太教の弊を受
くるに至りしを以て之れに反抗し古義單純なる基督の福音に復歸せ
んことを欲せしものにして次第に「カトリック」教會に浸入し教會を腐蝕
して基督教の主義に悖戻せしめたる教理、教義、弊害を剪斷し去り、教法
大會議の決議及び法主より出てたる所謂傳説(Tradition)なる者に由ら
ず、唯た聖書中に教示せる所を執て以て信仰の標準となさんと欲し
たり、故に「プロテスタント」教の執て以て無上の標準となす所は聖書な
り。

「プロテスタント」教の大要旨に二あり、曰く、第一自由、第二精神的是れな
り。

第一 自由 「プロテスタント」教は教役者專政々治の束縛を解き、自由
ならんことを述べたり、曰く、基督信徒たる者は悉く皆な教役者なり、故に
其の間に神より同信徒を支配し、其の良心を委任せし、特別の品位ある
階級者あることなく、又た神或は耶穌基督の代理者たる人あるにあらず
と、又た加特利基教は信徒の自由に聖書を繙讀研究することを禁したる
も、「プロテスタント」教は信徒の自由に聖書を攻究する權利あることを論
せり、又た曰く、神と人間との交通は人間の自由にありと、蓋し加特利基
教は神との直接の交通は信徒の自由に爲し得へき所にあらず、信徒は
先づ教役者、教會の媒介を乞ふて、而して後始めて神と交通を爲し得と
説き、教役者のみ獨り權を専らにし、隨意に或は信徒の神前に接近する

を許し、或は之れを禁じ罪惡を免じ、或は之れを免さざるを得と爲したり。故に加特利基督教が人の精神を束縛支配するの勢權は云ふに忍びざるものありしなり加之學術に關する自由の研究は一切之れを禁じ、教會の教旨と一致せざるものは悉く罪となせり、プロテスタント教は實に吾人を此の精神的奴隸制より救ふに宗教的自由の主義を以てせり。第二、「プロテスタント」教は加特利基督教の外飾的宗教に反抗するに、内心的宗教を以てせり。夫れ耶蘇基督は山上の垂訓に於て明白に宗教の外飾或は儀式に流るべからざる所以を教示したり、然るに加特利基督教は再び外飾儀式の弊に流れ、猶太教偶像教の轍を蹈むに至り、信仰、敬神、神靈を受けたる潔白の思想よりも、寧ろ外飾的儀式を修行するを專一となし、順禮、告罪、意味をも會得せざる祈禱文の暗誦、念珠、教會への寄附、施餓鬼、遁世を無上の敬崇となせり、故に「プロテスタント」教は大に之れ

に不同意を稱へ、宗教の第一義となして尊重すべき所は心或は意想の敬神に濃厚なるにありて、善業は此の心より混々として自然に湧出すると、恰も源泉潔ければ水流亦た從て透明清潔なるに等しきか如くならざるべからずと論せり。

「プロテスタント」教は遂に能く其の功を奏して、元來の基督教を興復し、聖人崇拜、神母アリヤ崇拜の如き偶像教的妄習を排除するを得たり、然れども世上豈皆な有識具眼の士のみならんや、「カトリック」教會は陋習を破り、改良を欲せざりしなり、故に「プロテスタント」教會は「カトリック」教會より分離するに至りたり、而して「プロテスタント」教は自由の主義を取りて立ちしを以て忽ち無數の「プロテスタント」教會起れり、「ルテル」教會、改正教會及び其の他諸教派然りと雖も亞米利加に起り、或は米、英より歐洲大陸に傳播せし無數の「プロテスタント」教派は皆な「プロ

テスタメント教の主義とする所即ち自由と精神的との二者を共有す。固より今日に至るも尙ほ多の誤謬弊害は教會内に依然として存在するもあらん、吾人は地上未だ完全なるもの即ち天國を得ざれば止むを得ざるなり、而してプロテスタント信徒たる吾人は我カトリック教會の兄弟を蔑視、輕侮せず、宜しく彼等をも亦た我同胞なる基督信徒として敬愛せざるべからざるなり、然りと雖も復た一方に於て、吾人は耶蘇基督の自由にして精神的なる基督教と、不自由にして儀文的なるカトリック教の主義に至りては大相異あるとを常に念はざるべからず。

我教會は舊古の二「プロテスタント」教會、即ち獨逸の「ルテラル」教會、瑞西の改正教會の神學者の基礎を置きしものにして、自稱して普及福音教會と呼べり、蓋し我教會は獨立獨歩を冀望し、歐米にありて已に歴史の形を成したる教會は、自ら其地に適する者にして、全く事情歴史を特

にせる日本の地に其の儘移植するの不可なるを知り、福音の單純なる主義を守り、プロテスタント的たらんとを欲し、從來歴史に存在せる信條の如き一として、絶對的に束縛するの權威あるものとせず、特に日本に適當なる信條を得んとを日本基督教發達の將來に委せんと欲するものなり。

第三章

神の國

神の國とは何ぞや、曰く、基督信徒の希望する全人類の唯だ其の名のみならず、思念と生活とに於て神の眞實なる子たるの狀態を云ふなり。此の最高なる完全の域に發達するは、神の賦與したる人世の目的なり、吾人固より其の時期を預知する能はずと雖も、思ふに數千百年の後必ず人世の中は、唯だ平和と愛とのみの充満する處となり、人各善を行ひ、信

仰、人種、位階の差等あるが爲めに相反目するか如きとなく、知氣照々として、人世は是れ一の大なる神の一家と化するの時來るを期す、是れ基督教の神聖なる希望にして此の將來の理想を名づけて神の國とは云ふなり。

第四篇

神論

第一章

神

(此の議論に付きては普及福音
教會叢書一二を參觀すべし)

神とは萬有の大原因、無限にして且つ純粹精神的の存在者を云ふ、然れども之れ言語の以て言ひ盡し能はざる所なり。吾人古來の史乘口碑を察するに、人種の黑白、洋の東西を問はず、凡そ人は皆な恒に神の存在を想像せしものなるを知る。抑も此の想像は何處より來りたるものなる

か、是れ吾人が好んで知らんと欲する所なり。彼れ人間は自己を包圍する六合の内を望見するに、此の絶大、奇觀の宇宙萬有果して誰の作爲する所なるか、彼れ明らかに己れの作爲せし所にあらざるを知る、又た能く此萬有に於ける巨大の勢力と無上の美妙とは自己の勢力と知識とに勝越する萬々なるを知る、是に於てか人は想像して以て、之を作爲せし者は神即ち思辨の力ある大原因なりとせり。實に吾人は何の地何れの時を問はず、進歩の多少こそあれ人は皆な神を求めたるを知るなり、故に吾人の精神は曰く、若し人心慾望の目的とする所の者にして實在するにあらざるよりは此の欲望は決して人世に普及なる能はざるなりと、若し夫れ欲望の仰向する所にして虚無ならんか、數千百年の間、滿天下の萬民擧て同一の欲望の爲め甚た激動せらるゝの理ある難し、況んや若し此の欲望にして少しも實在せざるものに向ひしとせんか、其

の人世に普及して一般なると、常に永續し、且つ其の根原は人心の蘊奥にあるとどの理を解する能はざるに於てをや。蓋し吾人は先づ神を欲望し、遂に「神在す」と想像するに至るものなり。又た吾人は我小天地の内、我れ若し惡を行へば必ず我を批難、詰責し、晝夜我れをして安を得せしめず、我れ若し善を爲せば我れを賞し、我れを幸福ならしむるの聲あるを感ず、吾人之れを名けて良心と稱す、而して此の良心なる者決して我力の能く左右し、我自由に壓滅し得べきものにあらず。故に人は此の聲は己れよりも高尚、善良なる者の聲なり、と信し、遂に人は良心に因り善惡の大裁判者存在し、此の聲は大裁判者より來るの聲なりと想像するに至る。

人或は言を爲して曰く、神とは我精神の識るを得ざる秘密なり、吾人の五官力は以て之れを感知する能はず、智力は以て之れを穿つ能はず、故

に神の存在なる者我れ之れを信する能はずと、其れ然り豈に其れ然らんや、神は秘密を以て包圍せらるるとの口實は未だ以て神の存在を否定するの論證となすに足らざるなり、論者看よや吾人の智識の開説し能はざる秘密は天下の萬物に於て比々皆な然らざるにあらずや、彼の草の一葉、是れ自然界の極小物のみ、而して其の生成、組織等の理を推究するに至りては、人智は悉く之を解説するを得ず、殘る所は秘密なり、若し已に自然界の極小物にして人智の進入し能はざる秘密ありて存するならんか、無限の造化は吾人弱小人間の爲め、無量の秘密を藏すとすも可ならずや。

第二章

有神證據論

若し夫れ吾人は、神の存在せる證據を辨論せんと欲すと云ふと雖も、其

虚となし之れに一秒時間に方一尺の石を投ずとせば、四十三萬八千三百五十六年一時廿六分廿四秒の後其虚穴を充たすを得べし、然れども太陽に至りては更に甚た巨大にして、蓋し其の地球よりも大なると百五十億倍なることを知らば、吾人をして轉た絶大の感あらしむ。然れども再び銀河と相比せば太陽の大なるも物の數となすに足らざるなり、太陽の如きは實に銀河中の一小星に過ぎざるのみ。茫々たる星天、其數を知らんと欲するも得て數ふべからず、只だ見る巨萬の群小星、之れ亦た太陽にして數多の遊星之れを圍繞して廻轉し、各太陽系を作り、一天地を爲さんとは、之れを瞻望せば眼目眩し、之れを思考せば腦裏亂る、然れども此の無限の天体中亦た森嚴緻密の秩序、法則依然として存し、敢て亂るゝとなし。故に天文學者は數十百年の前能く將來を計り、何時、何分、何秒、何れの處にありて何星、何星と相并ふべしと預言するを得るなり、

抑も此の壯觀、奇絶は秩序を制定する者を待たずして存する能はざるなり。然り而して若し吾人にして宇宙萬有の秩序により、神を認識せんと欲せば、宜しく一小部分に着目するとなく、眼を放て宇宙の全體、其の連絡を達觀せざるべからず、*Leverrier* が海王星を發見したるが如きは、天体中に秩序法則の嚴然たるを即知するの適例にあらずや。時計の進行は實に正密なり、然れども星辰の運行の更に正密なるに如かず。他の技術品已に秀才の技術家を待て始めて成るを得るに非らずや、誰れか巧妙無限、至微至大の奇觀、宇宙萬有に秩序者なく、之れを産む者は偶然なりと説かんとする者ぞ、偶然なる者之れ盲目なり、彼れ決して秩序を作り出す能はず、全能の秩序者なくんば宇宙なるもの、吾人之れを解説する能はざるなり、蓋し宇宙は秩序の充滿する所なればなり。

其二 終局的有神論

終局的有神論とは創造せられたるもの、聯結宜しきに合ひたる點より、神の存在を證論するものなり。

宇宙の間何れの處を觀察するも、吾人は受造物の決して偶然の産物にあらず、英明大智の思辨之れをして生成せしめし形跡を發見せずんばあらざるなり。自然界には則ち目的、企圖あり、萬物皆な目的に合ひ、企圖に従ひ造られたるを見る、故に造物主は萬物創造の以前、已に業に自然界の爲めに計畫企圖せし所ありし者と云はざるを得ざるなり。

其れ然り、故に受造物は其の創造せられざるの前、造物主の精神の中に在りて已に業に思想として完成せしものと云ふべし、然り而して其の計畫、企圖の完全、俱備せるは吾人明かに自然の法則と其の作用とを見て曉知するを得ん、(例之水の循環、植物動物の呼吸に由り元素の交換、礦物、植物、動物三界の階級の如き、又た特に自然に企圖あるを證明するの

好例たるを得るは眼の構造にして、眼は元と闇黒の室内に構造せらるるものなりと雖も、能く將來にありて光線を感受するに適當なるの器たるが如き是なり)吾人此れを明らかに觀察し、深く熟考せば、焉ぞ創造の大原因は思辨にありて、盲然闇愚の偶然にあらざるを首肯するに躊躇せんや、吾人は自然の法則と其の作用とを觀察し、其の巧妙不思議なるを絶驚、賞嘆せずんばあらざるなり、而して其の由て來る所以の大原因たる大思辨は、決して人間の智識の比にあらず、之れを超絶する萬等、無限、絶對なり。且つ其の勢力の如きも全世界の人力を合一するを得るあるも、決して企及すべき所にあらざるなり、夫れ宇宙の深遠を達觀せんと欲する者は、此の全智全能者の存在を承認するにあらずんば、世の創造と其の聯結企圖宜しきに從ふたる所以を解する能はざるなり、吾人は實に此の存在者を神と稱す。

之れを例するに、草木は種子より生じ、種子は復た草木の生産する所なり。鳥は卵より生じ、復た卵は鳥の産む所なり。吾人若し之れを思考して相逐ひ遡行せば、環の循行して究極無きか如くならん、然り而して此の循環の間、規律、企圖、自ら整然備具す、是に於てか吾人は法則企圖は何れ由り生し來るやを問はざるを得ざるなり、答ふる者或は曰く、此れ等凡百の事皆な自然にして生ずるもののみ、何ぞ神なる者の關涉掌知する所ならんや、甲者は自然にして乙者を生産せしもののみと。されども吾人は須く第一の種子若しくは卵は誰の作為創造せしものなるかを質問せざるべからず、彼の第一の卵或は種子の中に將來、有機體を發生し得るの成分を悉く合貯包有せしめたる者は果して誰れぞや。盲目の偶然豈に此の聯結、企圖宜しきを得たるものを生産するを得るものならんや。是れを推究し來りて吾人は復た創造は萬智にして思慮あり人方を

を超越したる無量の勢力より出づるものなりと歸納するの必須なるを曉知す。此の勢力吾人之れを名けて神と稱するなり、若し夫れ現今の科學は萬有の大始を以て所謂元細胞即ち至微の「プロトプラズマ」にありとなし、最不完全のものより人類に至る萬般の者は、皆な此の元細胞の數百萬年の間に漸々發達進化したるものなりと開説すと雖も、之れ亦た神の存在を否定するの學理にはあらざるなり。進化説を許容し之れを眞理なりと承認せば、吾人は更に元細胞を造りし者は誰なるや、プロトプラズマ中に將來に於て萬活物を發生し得可きの成分を悉く合貯せしめし大智者は誰なりや、萬有の種子即ち「プロトプラズマ」なる者を造りし時、已に萬有の進化を其の思考中に畫出せしものは誰なりや、の諸疑問を羅列せざるを得ず、而して之れに答ふるに誰とは即ち偶然なりと云ふの理由毫も存せざるなり、蓋し偶然なるものは盲者のみ、彼

れ、決して計畫企圖の整然とし、秩序の嚴然たる萬有の造化を作す能はざればなり。又たプロトプラスマなる者決して虚無より發生せりとなす可らず。蓋し有は無より生ずるの理なければなり。故に吾人は是非とも萬有の元種子を創造せし者は、思辨力を俱有する萬智者即ち神なり。と云はざるを得ざるなり。是れ實に論理上必至の理なりとす。吾人は唯た此の理に由て以て萬有創造の大始に當り已に業に企圖熟慮思辨の存在せし理を解釋し得るのみ。

然りと雖も神の實體の如何なるものなるやを思考するに當り、吾人は決して幼稚なる觀念を學び、神とは人間の如き形體を具へ、人間の如き情慾を具ふるものなり等、偶像宗教の觀念に類似する觀念をなすべからず。神は靈にして人眼の能く識見し得るが如き者に非ず、其の形體の如きも有枝的に考ふべきものに非らざるなり。吾人は神を精神的に思

考する彌高ければ高き丈、吾人は神を思考するに眞粹正實なるを得るなり。而して純潔眞粹は人の大始より冀ひ得るものにあらざ、故に人世も亦た始め神に關して甚だ粗野淺薄の觀念を爲し、粗野淺薄の觀念漸次に進歩して純正精神的の觀念とはなりたるなり。

吾人熟ら我を圍包する萬有を考察するに、全萬有の裏には一定不變の自然法則ありて嚴然として存し、萬有界の出來事は一として此の法則に乗らざるなし。學術固より能く此の法則を發見するを得べしと雖も、人智は此の法則を作りしものにはあらざるなり。故に此の法則なるものは高等の智識即ち神の造りしものたらざるべからず。人言はずや法律の在る處には復た必ず立法者あらざるを得ずと、法は則ち熟慮の結果にして、盲目の偶然は法を立つる能はず、萬有に法則あらしめたる英明大智の立法者は即ち神なり。若し神にして實在せずんば自然の法則

も亦た現存せざるべし。既に自然の法則の在るあり、神も亦た存在せざる可からざるなり、然り而して吾人は實に萬有中の物質は皆な非物質的なる法則に服従するを見るなり、知るべし物質は法則を支配する者にあらず、思辨は物質を支配するを。

附

害悪と有神論

萬有界に生ずる事蹟にして、吾人の見て以て甚だ不規律なり、少しの企圖する所もなしと嗟嘆すべきものあり、是れ大に我有神論と矛盾するものにあらずやと詰るの論者あり、吾人亦た此の解釋なくして止む能はざるなり。

一 一人の以て甚だ不都合の事なりとするもの、反て他の以て甚だ宜しきに合ふたりとするが如きは時に多く之れあり、如此は多く人間の

近視眼的偏狭なる立脚地にありて出来事を評價するが爲めなり、若し吾人にして宇宙萬有を觀察せんと欲せば、宜しく萬有全体の連續、聯合を達觀するを要す、若し然らずして唯た一小局部にのみ着目せば、恐らくは單に眼前の事のみを知るに過ぎずして、其の判断や狹隘ならん、由是目前には不都合の如く看ゆるものも大勢の上より觀察を下せば、不都合なるものにあらざるとを洞見せざる者往々にして是れあり。

二 今世人の以て不都合なりとなすものも、將來の人の以て大惠事となすもの世多く之れ有り。

三 人類に大害を與ふる自然の出来事なるものは元と是れ一定不變の自然の法則に因て生ずるものにして、自然の法則なる者は造物主が萬有を支配する大思想なり、故に自然の法則なるものは人間の下に立つべきものにあらず、人間の上に立つものなり、故に人は自然の法則に

服従すべきものにして、自然の法則は人に服従すべきにあらず。唯た人の爲し得べきは自然界に於ける神の思想即ち自然の法則を認識するにあり、之れを認識する者は復た之れより生ずる危害を避け、自己を保護するの道を曉知せん。其れ然り自然の法則なるものは不完全あるものにあらず、吾人人間の智識こそ反て不完全にてあるなり。されば人は自然を曉知するの智識の遠大となるに従て、其法則の嚴正、巧妙宜しきを得たるを驚嘆し、從來己れの近視にして誤て不順序なり、宜しきに合はずと嗚々せしの愚を憐むに至らん、而して吾人は更に吾人々類は無限の神に對すれば甚だ弱小、至微にして其の比決して動物と吾人との比の如きにあらざる萬々なるを記憶し、人の以て甚た善美なり、巧妙なりと思惟する所のものも、動物より之れを見れば惡醜拙劣なるの評あるを思はざるべからず。

此の理由あるが故に自然の裡に、不都合にして宜しきに合はずと爲すべきものあるは、其實然るにあらず、人智の不完全にして自然を達觀し能はざるにあり。若し人智の發達宜を得て、萬有を認識して到底し、其の眞想を穿つに至らんか、從來自然の不完全、宜しきに合はざるものとせられしものも煙霧の如く滅すべし。

其三 道德的有神論

道德的有神論とは道德の法則を基礎となし、神の存在を辨證するものなり。

全世界を通觀するに、善惡てふ精神道德的反對者の貫軸するありて、何人種の人たるを問はず、生として生ける者は皆な善惡を區別し、且つ善の爲すべく、惡の行ふべからざるを知らざるものなし、抑も人世に於ける道德の法則は果して何れより來るか、是れ一大疑問なりと謂ふべし、

人或は之れに答ふるに萬人嘗て互に相契約する所ありたるに原因すと云ふと雖も、此の説たる甚た非なり、蓋し事實上よりするも契約のありし形跡なければなり。又た此の法則なる者學校或は教育に因りて生したりとなすの理あらず、蓋し學者も教育者も皆な復た道德的法則の下に立つものなり、故に先づ學者或は教育の任に當る者に授くるに此の法則を以てし、之れをして此の法則に従て兒童を教育せしめし者あらざるべからざるの理なり。教育者なるもの果して之れを發明せしものなるか否、決して然らず、教育者なる者は唯た單に此の思想を明瞭にし、吾人に向て其之れを順守せざるべからざるを教示するのみ、故に此の法則なるものは萬人の上に超絶し、善を好み、惡を惡む無限の靈に原因せずんばあらず、而して此の精神的勢力即ち善の大本は自ら善ならざるを得ざるなり、若し然らざれば其の吾人に善ならんとを命じ、惡

を排斥するの理由を解明する能はざるなり。加之道德的の規律は必ず實施せらるゝの事實は神の存在を證するものと云ふべし、何をか事實と云ふ、曰く、萬國歴史に於けるも民種の生活に於けるも、或は又た一個人の生活に於けるも、善事必ず善果を收め、惡事必ず惡報を受くる是れなり、猶太、羅馬、希臘の滅亡の如き昭々として皆な其例證をなせり、固より應報には外形的なると内形的なるとの差別ありと雖も、内形的の應報を免かるもの世上決して之れあらざるなり。

人或は曰く、善事必ずしも常に外形的の善果を收めず、惡業必ずしも常に刑罰を招かざるにあらずやと、此の言甚た眞なり、然れども未だ以て道德的法則の存在を否定するに足らず、蓋し善惡の應報、賞罰は屢内心的なるを以てなり、何をか内心的の賞罰と云ふ、曰く、内心的の賞とは心情内の平和、幸福、安慰にして、罰とは心情内の不和、不安、絶望なり、嗚呼身

は宏壯華美、珠玉を鑲むるの第宅に住し、綿繡温衣體を包むも、内心は寒冷にして、戰慄し、一瞬時と雖も安慰を得ざるものあり。襤褸を纏ひ、飢餓の傾屋に寒凍するも、衷心自ら春暖かにして、平和を得たるもの世多く之れ在るにあらざや、人の幸福なるものは善良と正比例するものにして、善者必すしも外形的に幸福を受くるを得ざるも、内心の幸福決して疑ふべきにあらざ、悪者の受罰は常に外形的ならざるにもせよ、其の内心の不幸なる甚た恐怖すべく、憐憫すべきものあるなり。

詰る者あり、曰く、説くことを止めよ、不幸、災害の世に存するは慈愛の神の存在を否定するものにあらずやと、然れども論者は一を知て未だ十を知らざる者のみ、吾人を以てすれば此れ等の者一として神の攝理を發揚せざるものなきなり。

(一) 人若し常に安泰幸福をのみ得るならんか、道德の強大毅然たる品性

は決して冀望すべきにあらず、且つ人世の生活にも亦厭倦を生せん、詩人が「幸福の日の永續するよりも堪へ難きものはあらず」と云ひしは眞理にてあるなり、困難を忍び、苦痛に耐へ、不幸に遭ふも挫折せず、後始めて人の内心は鍊磨を受け、健強なるを得ん、是れ恰も風濤、炎熱を凌ぐの人は、多く身軀健全なるが如し、(二) 禍害反て幸福となると云ふも不可なからん、人の品性は禍害によりて精練せられ、禍害は反省を促し、爲めに善良に移る者多し、思ふに大罪人が病苦の爲めに或は他の禍害の爲めに、勸告せられ忽ち猛然として心を改むるは決して稀有の事にあらず、知るべし禍害不幸の存在は決して道德的法則とも亦た善良慈愛なる神の存在の理とも柄鑿するものにあらざるを。

道德界の大法、良心の事に至りても亦た然り、無神論の到底開説し得る所にあらず、抑も良心は萬人の皆な有する所なり、而して此の者何れよ

り来るか、且つ良心の語る所は何れの人に向ふも、常に同一なるは何故ぞ、若し夫れ良心は人工によりて生ぜしものならんか、人の再び之れを捨つる猶廢履の如くなるを得べく、或は初めより良心を自與せざる者あるを得ん、若し夫れ良心は人の養成せし所ならんか、先づ其の養成せし根本となりし者あらざるを得ず、此れ果して誰れの與へし所なるか。教育は各人に依りて差異あり、而して萬人皆一樣に良心を有するは一、大奇觀にあらずや、吾人若し此の一大事實を解釋して餘蘊なからしめんと欲せば、如此良心なる者は己れ自ら善良にして、且つ人を善良に誘導せんと欲する存在者より来るものなりと論究せざるを得ず、茲に所謂存在者とは即ち萬能萬智の存在者にして、外界萬有に法を附與し復た精神道德的の大本なる良心の法則を與へし者なり、而して其法則たるや不撓不屈一の私なきものなり。

其四 宗教的有神論

吾人は前文に於て萬有と道德界とに基き、有神證據論を略叙したれば、今や歩を進めて神の存在に關する宗教的證據論に入らんとす。夫れ宗教的人間は其の心中已に神を見、内心已に神に接近し、神の働きあるを感得し、見るを得ざる慈愛聰明の勢力は、己れを充實するに神聖の思想を以てし、己れを獎勵、感激するに神聖の決心を以てするを熟知し、又た神と相語るの祈禱に於て無限の慰藉を得、神と相交通するの生活に於て神聖なる調和と絶快の平和を得たり、而して其安慰、平和や慈母の懷慈父の膝に倚る小兒の平和、安慰の幸福なるの比にあらざる也、是に於てか、人始めて直接に又た其の中心確實に神在すを知る。

夫れ神と此の交通に立ち、神を感得したる宗教的人間の爲めには、神常に現在す、故に復た苦慮學理的の證據論に依て、漸く神を發見するの必

用なく、宗教的心情の深遠温乎たる穩々として確證して曰く「神在すと

第三章

神の性質

(若し哲學的に嚴重に論せば、神には變遷なく、且つ神は諸區分より成る全者にあらざれば、神の諸性質と云ふは不當なり)

元來吾人は神に就て唯た一を言ひ得るのみ、曰く「神は完全なり、絕對なり、是なり、而して若し絕對の神を有限の顯象に應じて考ふれば、神の性質と稱すべきものを得るなり、然りと雖も、是れ單に有限の人間の立脚地より觀察せしもののみ。

神は時に關して絕對的なり。換言せば神は永劫にして時の限界を超出す、故に神に取りては過去ならず、未來ならず、常に現在なり。神は永劫にして常住なるか、故に、復た其の意志、法則も永劫にして常住

たり、吾人能く之れを万有界と精神界との法則に於て見るを得べし。

神は在さざる處なし。換言せば神は空間に關しては其の限界を超脱し、靈なる神は宇宙内行く處として現在し、賜はさる處なし、是れ豈に人間に對し勸告激勵する所なからざらんや。

神は全知なり。即ち宇内の事一として知し、召さる所なく、其の知し召す所絕對なり。

神は全智なり。人固より才智あり、其の思考する所、經營する所、復た目的に應じて計圖するを知る、然れども人智や不完全にして、其の直ちに以て目的に到達すべしと固信する所のものも、實際に於ては大に然らざるもの往々是れあり、神に於ては決して然らず、神は迷路誤謬に陥るものにあらず、其の用ゆる所の方法手段や完全無缺にして、其の基け賜ふ所や全璧なり、故に吾人は神のなし玉ふ所は善美完全にして、吾

人の命運も亦た神の教導により、完全の域に進歩するとを確信し、設之我命運は單に表面上より觀察せば、大に之れに反きたるが如き觀を呈するものあるも、毫末と雖も懷疑の念あるべからざるなり。

神は能はざる所なし。人力固より甚た強大にして、能く大事を企圖し得へし、然れども亦分限のあるあり。神力や強大無邊にして、決して分限の存するあらず。故に吾人は宜しく人力已に盡き、救助の望絶つ所にも尙ほ之れを祐助し得るの神力あるを信すべきなり。

神は聖なり。聖とは罪惡の汚染を受けざるの謂なり。人は元と自ら聖ならざるべからざるを知る甚た深しと雖も、實際と理想とは大に相反し甚た不完全なるものにして、全く聖潔、潔白雪の如き人あるなし、語に曰く、義人あるなし、一人もあるとなしと、而して神の清潔にして、絶對的に聖潔なる、吾人之れを我良心即ち神の耳語に於て明かに覈知す

るを得べし。良心なるもの毫頭微細のたと雖も、敢て不善を假さず、罪惡を許容するとなし。苟くも基督信徒たる者は日に三たび己を省み、聖潔恰も神の聖徳なるか如きに至らんとを勉めざるべからざるなり。

神は正義あり。正義とは罪惡を責罰し、善良を褒賞する是れなり、固より吾人々間と雖も亦た日常正義たらんとを慕ふ恰も鹿の溪水を慕ふが如く、之れを冀望して止まずと雖も、其の及ばざるや甚た遠し。然り而して神の正義は絶對的なり、人焉ぞ惑を執りて可ならんや、語に曰く、自ら欺く勿れ、神は慢るべからずと、神の完全なる正義の法則は永劫に亘りて決して變するものに非ず、たとへ外形的なるも内心的なるもの區別あるにもせよ、善良は必ず褒賞を受け、罪惡は必ず責罰を受け、善良は最後の勝利者となり、罪惡は遂に滅亡に歸せん。

夫れ人世廣く人間多しと雖も、能く神の實体の玄又玄を感得したるは

如何に考察するも耶蘇基督たるや必せり。曰く、神は人間の父なり」と、夫れ神人間相互の關係たるや、子の其の父に於けるか如く、又た父の其子に於けるが如き精神的の關係に等し。而して兩者を結合せしむる愛の交通たるや、内心の蘊奥より發し、天真爛漫、真情甚た温優にして、神は吾人々間に注くに無限の愛を以てし、神は父なるが故に吾人に仁恤と慈恵を垂れ、且つ能く不潔罪惡の人間を仁恤し、好んで功購なきに罪を赦免し給ふ、蓋し人間に對する神の忍耐は決して際限あるとなきなり。

第四章

基督教の三位一體論

基督教會の初代早く已に、一種特異なる神の三位一體てふ教義發達せり、曰く、父なる神、子なる神、聖靈なる神ありと、吾人は宜しく謹みて此の

教理を淺薄に文字通りに解釋し、此の教義は三昧の神々の存在を説くものなりと誤解せざるを要す、夫れ神の意義中に三區別を爲すは多數の宗教中に屢見る所にして、吾人は又た殊に印度の宗教中に此の事あるを知れり、余は今基督教教義なる三位一體説の骨髓とも云ふべく、深遠、真正なる哲學宗教的の意のある所を少しく論せんと欲す。

父なる神とは世と人間とに關係なき、自體獨立の神を云ひ、子なる神とは己れを人間に知らしめ、啓示する神を云ふ、故に子なる神即ち三位中の第二位は世界殊に人と關係するの神を云ふなり、聖靈なる神とは世と人間との内に在りて働く神靈にして、人の精神中に道德宗教的に大能を顯はし働くの神を云ふなり。

又三位の第二位と基督を同一視せり、是れ蓋し基督と其の福音とを以て神の啓示となすに原因するものなり、此の觀察は徹頭徹尾不道理な

りと排拆し一笑に付し去る可きものにあらざ、固より耶蘇基督なる歴史的人物を以て神なりとなすは理に於て不可にして、吾人は之れを首肯する能はずと雖も、福音の精神は神の啓示なりと云ふを躊躇せざるべし、而して此の福音は歴史的基督に於て恰も人物を作し、基督の人物は恰も生命ある福音と云ふべし。思ふに耶蘇の教示せし所と其の行爲即ち其の生活せし實際とは同一のものなり、故に吾人は基督と基督教とを同一視すと雖も、敢て不可なかるべし。然り而して基督教の主義は、神と人間との合一を説く神子主義なるが故に、耶蘇の歴史的人物は恰も神子主義の最も純粹なる實物にして、世の歴史は未だ曾て如此絶潔なるものを見しとあらず、之れに因りて直ちに耶蘇を稱して神子と云ふ。其れ然り故に神父、神子、神靈とは三個の神々を云ふにあらず、唯一の神を三異の點より觀察するものにして、三個の觀察法に基くものなり。

第五篇

人間論

第一章

神に對するの愛

夫れ宗教者の一大義務となすべきは神を愛するにあり、然れども人或は謂ん、眼の以て見るを得ざる者を愛し得るの理ありや、是れ甚た疑ふべし、否見る可からざるものは世上何れの者と雖も、吾人は決して愛する能はざるなり、猶之れを例せば、吾人の空氣を愛する能はざるが如し、何となれば空氣なるものは見るべからざるものにして、又た生活なければなりと、然り而して吾人は試みに更らに吾人の見るを得ざるものなれども、生活あるものを擧げて之れを愛し得るや否やを考究せんとす、曰く、設之吾人はツアラタルの太守を愛するや否や、吾人は毫も之

れを愛するの念なかるべし、何となれば彼れは單に吾人の見ざる者のみならず、又た吾人と無關係の者なればなり。然らば吾人は更に吾人の見ざるものなれども、吾人に今關係ある者或は嘗て關係ありし者に就て之れを考究せんとす、曰く設之吾人は我死母を愛し得るや否や、我母今や亡し、我れ今我慈母を見る能はず、然れども吾人は之れを思ふ毎に心悸鼓動し必ず斷々乎として之れを愛すと確答せん、蓋し我か亡母は我れと關係ある深且つ大にして、泰山蒼海も以て比するに足らざるなり、寧ろ亡き母を愛すると、在す母を愛するよりも更に深且つ切なるの人あるなり。由是觀之愛を致すの原因と云ふべきものは見と不見とに關すと爲すべからず。故に吾人は神を見るを得ざるを以て神を愛するを得すと云ふべからざるなり、否吾人は神を愛せざるを得ざるの責任あるなり、蓋し神の吾人に於けるは亡き母の吾人に於けるが如き關係

の比にあらず、吾人は嘗て神と關係を有したりしのみにあらず、常に其關係を保維せざるべからず、又た吾人の深く神に感謝せざるべからざる所のもの無邊無量なり、豈我亡き母に感謝すべきもの許多なるの比ならんや、思ふに宗教者たる者は其の神を愛するよりも更に大なる愛を知るとなし、蓋し愛とは己れが愛する者に對して全心を注入する是れなり。

夫れ人の神に於ける愛は、敬畏、信任、服従の三者によりて顯はるなり。

第一、神を敬畏す 異宗教殊に回々教、猶太教に於ても亦た吾人は信徒等が神に對して神聖の恐怖、即ち敬畏の念を抱く甚た深きを知る、基督教徒たる者焉、此れに勝る所なくして可ならんや、吾人若し絶大のもの或は大勢力ある者と對坐せば如何、我胸中豈に悚然、又た奮然たる者なからざらんや、海に臨み波濤高く卷て天に朝し、其直下する

は嵐々として大山の額を、が如く、潮聲恰も雷鼓の如くなるに對せんが。或は怒雷天地を鼓動し、人耳を聳し來るに遭へば如何、一種言ふべからざるの情其胸襟に發し、敬畏の心動くにあらざるや。宇宙の一現象に對して已に然り、吾人微弱の人心、焉ぞ宇宙を總括するの神靈、絶對無限の者と對坐し、敬畏の念勃然として發起せしめて可ならんや。又た焉ぞ神聖なるものを輕侮し、貶見し、嘲罵するを得んや、吾人は凡て神聖なる者に對し、敬畏謙遜の心を盡して尊崇稱嘆せずんば止む能はざるなり。

第二、神を信任す。兒子は能く其の慈父、慈母を信任し、我父母の我れに爲す所は悉く善きを信ず。基督信徒たるもの、其の神を信任するに至りても亦た猶ほ兒子の慈父に於けるが如し、神は我れを撫愛する者なり、故に其の爲す所は皆な善しと信するなり。然り而して神は無限にして其の知識も亦た無量なれば、基督信徒が神を信任するは、子

の其の父を信任するよりも更に大且つ深からざるべからず。人の神を信任するより生ずるの結果は如何、曰く先づ心情に満足を得べし、即ち基督信徒は如何なる地位境遇にあるも、如何なる職分にあるも、自己は神の意思によりて爰に至りたるを思ひ、敢て天を恨み、心に不満の念を抱かざるなり。又た何れの地位に立つも、自ら其の人世に缺くべからざる必用の機關たり得るを知るなり。又た神を信任するものは如何なる艱難、痛苦に遭遇すと雖も、神之れを欲すとの覺心を以て欣々然として忍耐、歸順す、蓋し是れ如何なる痛苦、不幸も神の憐恤にして、其の聖明なる意思より出づとなすを以て、耐へ難きをととせず、悦んで之れを忍び、神は痛苦の暗澹たる幽谷を過ぎて、幸福の輝然たる平地に導き玉ふを信するなり。又た神を信任するものは其の結果として、何物も以て其の不幸となす

に足るものなく、或は一時其の心を驚駭せしむるものあるも、永く彼れをして愁嘆せしむるに足らず、常に爽快、安慰の心を抱くべし、是れ彼の慈父、慈母の慈愛を受くるの兒子は、其の心情常に爽快、嬉樂なるが如し。又た神を信任する者は善事を爲すの力を受け、善事に健強なるを得ん。且つ惡と冒神の業は一時或は勝利を得るも、是れ眞に一時の事に過ぎずして、最終の勝利者となるべきものは善にありとの慰藉と希望とを有す、然り而して神を信任するの最大恩賜は靈魂の平和、是れなり、此の平和とは死にあるも、生にあるも、安樂にあるも、辛苦にあるも、毫も動搖せず、一定不變、悠然たる安心を云ふなり、此の心たる決して之れを言語となし、文章となし得べきものにあらず、設之之れを言語、文章となすも皮相に過ぎざるのみ、此の心や唯た此の心ある者にして能く其の眞想を知り得るなり、謂つべし人各自ら之れを其の衷心に感じ、而して後ち

能く之れを知るを得と、蓋し此の心たる宗教的生活の最大結果にして、又た最大至寶なり。信仰を有し、神と相感通し生活する者の獨り専らにするを得る所とす。

第三、神に服従す

神に服従すとは神の意思に従順なるの謂

なり、蓋し神の意思や善し、故に吾人は好んで之れに従順ならざるべからず、吾人は實に神の意思を我命運に於て知るなり、故に基督信徒は其の遭遇する所の命運は神の意思なれば、之れに不平を稱へず、爲めに失望、落膽せず、反て如何なる命運にあるも、凡て皆な我れをして完全に至らしむるの手段なりとし、神に感謝す、吾人既に神は善を欲するものなりと知る、故に神に従順なるものは凡て眞正の善は神の欲する所の者となし、之れを愛し、之れが爲めに滿腔の熱血を注ぐものなり。

第一章

夫れ人間なる者は受造物中に在りて最高等にして卓絶なるものなり
宜なる哉其の稱せられて受造物の靈長と呼はるゝや然れども吾人其
の躰を窺ふに他の動物と相異なる所以のものは單に其の構造組織の
精粗美醜の差にあるのみ之れを構造組織する所以の物質に至りては
毫も差異あるなし吾人若し深く其差別のある所を極めんと欲せば宜
しく之れを兩者の精神界の事に問はざるべからず動物亦た固より若
干の才智あるは欺くべからざるの事實なりと雖も焉ぞ人間の如く悟
性即ち高等才智の覺心を有するものならんや人間に言語あるは悟性
の發表に外ならずして即ち悟性あるの徴なり又た動物には美術的覺
心即ち美に對するの感情なく又た道德的覺心もなし動物或は之れを
養馴練習せしむるを得べしと雖も其の之れに由て得る所のものは善

惡を識別するの道德的覺心には非ず單に之れを訓練して人が之に命
ずる所のものを爲さしむるの習慣を養成するに止まるのみ又た動物
に至りては宗教的覺心もなく一無限者の存在を曉るとなし。

第三章

人間の道德宗教的發達

人間の幼稚なるや所謂稚兒無罪の狀況に生活するを以て未だ曾て善
惡の區別あるを知らず故に幼稚の時に當りては善を爲すも惡を行ふ
も共に責任なく善を爲すも之れを賞讃するに足らず惡を行ふも之れ
を責罰するの理なし後ち人は漸次に道德的覺心を其の胸中に形成し
遂に善即ち神の意思の何たるや惡即ち神の意思との齟齬(罪)の何たる
やを知るに至る然り而して又た之れと同時に其の爲すを欲せざるの
罪惡は反て之れを行ひ自己の罪人たるを覺知せずんばあらざるなり。

然りと雖も罪惡の現象に至りては、罪惡の性質と誘惑の度と、人の天性、品性の差別に因りて相異なる所甚た大なるや論を待たず。

第四章

罪の結果

凡そ因あれば必ず果あり、神は輕侮すべき者に非ず、輕侮する者は必ず其の責讓を受けん、罪を爲す者には必ず業報あるべし。其の業報或は有形身体上の責罰にして失産、貧困、疾病等の如きあり、或は内心精神上の加罪にして名譽、人望の失亡、心裏、家族、國家に於ける平和の破碎、失望、落膽、良心の苦楚、精神的死等の如きありて甚た類を異にすと雖も、罪惡は決して其の罰を遁るべきものにあらざるや斷乎たり。

人一朝、稚兒無罪の境遇を出つるや、必ず其の心中に善我即ち善を欲する良心と、之れに反對する罪惡の相衝突するを感知せん、吾人は實に善

惡の齟齬と衝突とを我胸中に藏するものなり。夫れ善惡の相容れざるや、猶ほ水火の如し、其の争鬭や猛烈にして悲酸なり、人一日も能く之れを其の胸中に耐へ得べきにあらざ、吾人は速かに之れに勝ちて罪惡の奴とならず、道德上自由の人とならざるべからざるなり、故に人或は此の束縛を化脱して、此の自由に到達せんと欲し、千百の計畫を爲すも、悲しむべし、皆な甚た非にして、通常此れ等の計畫は久しきを保つ能はず、寧ろ畫餅に屬するものなり、然りと雖も一方を顧れば、凡て神に反くものは神及び其の意思と分離、懸隔し我衷心の調和を破碎するものなり、是れ吾人人間の本性に悖戾せり、我が本性たるや元と道德宗教的自由に到達し自由の樂園に入るにあり、故に如何にせば自由にして自主の人となるやとの問題は人世の最大問題と云ふべし、實に我本性は此れが答案を切望して止まざるものなり、而して之れに真正の答案を

與へ以て人世の最大問題を解釋する者は實に基督敎なりとす。

第五章

律法の地位

其の個人の發達なると全人類の發達なるとを問はず、其の發達の中、吾人は所謂律法の地位なるものあるを知る。何をか律法の地位と云ふや、曰く、戒あり、禁あり、以て人間に善事は宜しく爲すべし、惡事は宜しく爲すべからず、善事を爲す者には賞あり、惡事を營む者には罰ありと命ずる是れなり、之れを兒子の教育に徴するに兩親が其の子に對し賞罰を設けて、戒禁する所あるの時は則ち兒子律法の地位にあるの時なり、然り而して律法の地位は尙ほ甚だ不完全の地位にして、個人も亦人類も共に此の地位にありて、眞正の自由を得るや難し、試に其の欠點を掲ぐ、之は左の如し。

一、人若し律法の命ずる所を爲し能はざらんか、心中大に其刑罰を恐怖し、且つ其の之れを實行するの能力なきに失望し、心大に煩悶すべし、猶太教

二、若し果して律法を實行すとせば、人自己の然かも只た外面上の正義に誇り、得々然として自ら以て義人となし、且つ禁戒を守るを以て道徳の最上に到達し得たるものとせん、蓋し律法の地位に於ける最大缺點は、人の善を行ひ、惡を避くるは其の内心誠に善を愛し、惡を惡くむが爲めにあらざり、善を爲せば賞あり、譽あるを思ひ、之れを欲望し、不善を爲せば罰あり、謗あるを思ひ、之を悚懼するが爲めなり、是れ甚だ卑劣、野鄙の心より出づるものと云はざるを得ざるなり、嗚呼、善事を爲すに啻た名譽、勢力、富貴等を願慮し、此れが爲めに彼れを爲すもの世上滔々として多し、然れども未だ以て眞粹の君子、誠に徳美を愛する者と稱すべから

ざるなり。故に律法の地位にある徳義は未だ以て完全の徳義と云ふべからず、個人にもせよ、又た社會にもせよ、道德の教育上、律法の地位に立つものは未だ以て最高等の發達に到達したるものとは稱ふべからざるなり。

吾人も亦自ら内を顧みて、正直に自己を觀察せば、恐らくは尙ほ律法の地位を脱する能はず、反て善を爲すに外面上の利害を慮り、惡を避くるに亦た外面的の損益を考へ、而して後ち之れを行ふことを決するにはあらざるか。人各己れを知るは徳の大なるものなり、己れを知る者は復た自己の罪人たるを認識せん。

夫れ基督教主義の生活を爲さんと欲する者は先づ罪を自白せざるべからず、是れ其の門に入るの始めなり、蓋し吾人は基督が唯た言行に顯れたる者のみ獨り罪惡たるにあらず、思考する所と雖も若し惡しけれ

ば其の罪たるを敢て其言行に讓らざるを説き、心の清き者は幸福なりと呼び玉ひしことを記憶するを要す、吾人若し自ら内省する彌、嚴密にして己れの己れに對するの心、彌、明白なれば、吾人も亦た彼の放蕩息子の如く、我道德の欠點と孱弱とを益多く認識せん。然り若し吾人にして徳を立て善を行ふの力なくんば、戒禁の律法は我れに於て毫末の益なき知るべきのみ、已に益なしとせば、律法の地位が吾人を勝導して、眞正有力、精神的の道德の堂に上らしむる能はざるも當然にあらずや。故に基督教は大唱、吾人を呼び、吾人に示すに他の道を以てす、曰く、人間は其の内心の蘊底より一新し、精神上、更生せざるべからず、是れ基督教が人間に請求するの革命事業にして、其の語を以て名けて更生と云ふ。

第六章

更生

更生とは二者を總括するの語にして、即ち悔改と信仰より成るものなり。

一、悔改

悔改即ち改心とは罪ある舊惡の心を全く捨つるの謂にして、悔改とは後悔の謂にあらざるなり。蓋し後悔とは犯せし罪惡に就て痛苦を覺ゆるを云ふものなりと雖も、是れ唯だ一時の事に過ぎずして未だ將來の改良を約するものにあらざるなり。

悔改は之れに反して我が總ての罪惡を慷慨し、我れに罪惡の性あるを痛嘆し、且つ之れを變更せんとを期望す、換言せば悔改とは痛苦と期望とより成るものと云て可なり。夫れ雨降りて地固く、平和は戦争の後生ず、基督信徒たらんと欲する者は宜しく先づ自己の荏弱と罪あるとを認識し、悔改の痛苦と熱望とを経て精神の平和、神との講和に到達するを要す。故に吾人は先づ我衷心に戦闘の痛苦を嘗め、而して後ち精神の

平和を得、又た神の祐助に因りて聖靈に満され、道徳上強健、清潔に、宗教上敬虔、厚信たるを得ん。

二、信仰

信仰とは新らしき人を衣るの謂にして、斬新なる人間を創造し自己を神に任托するの謂なり。

彼の譬喩に所謂放蕩息子之如く、罪人は自ら其罪惡を覺知し、大に之れを痛嘆、慚愧し、救濟を切望し、悔改して其の父の許に歸順せざる可らず。然り而して彼の放蕩の子をして痛苦せしめしものは、彼此の罪惡にあらず、彼れを誘惑して彼此の罪惡を犯さしめ、其内外の生活をして不幸ならしめたる全軀の罪業と其の荏弱との覺心は彼を襲撃して耐へざらしめ、其罪惡を認識するが爲めに生したる自家胸中の痛苦と期望とは、遂に彼をして父の家に歸らしめたり、是れ之を人を驅りて救濟に至らしむるの悔改となす。

子悔改して歸り來る父焉と之れを拒絶せんや、咽鳴雀躍して之れを入れ、其の舊惡を赦せん、子は復た幸福平和の身となり、父の膝下において新らたに清潔神聖の生活を營むべし。罪人も亦た悔改して神に歸順せば、神は之れに仁恤を垂れ、其舊惡を赦免し、毫末の功績なきも爲めに和き玉はん、神の和親を得たる罪人の此の新活路、即ち神との交通に於ける此の新生活、是れ之を信仰と稱するなり。

夫れ信仰なる者は人間の精神界に於ける最大勢力にして、人を驅りて萬善を爲さしめ、人を制して萬不善を爲さしむ、加之之れに最大の平和と福祉を與ふるもの皆な信仰の力にあらざるはなし、故に信者即ち信仰を有し、慈愛の父なる神と交通して、生活するの人は、其の信仰力に因りて以て誘惡に敗北せず、困厄に衰神せず、死に至るも煩悶、絶望せざるべし。夫れ罪人の神に至りて和を受くるは、猶ほ彼の放蕩の子の如

きなり、而して其の道に至りても、基督亦た實に之れを放蕩の子なる罪人に教示せり、基督は則ち人間をして再び神に歸順せしめ、又た人間をして神と相和せしめたり、故に人基督を稱して救主、或は中保者と云ふ。由是觀之、信仰とは所謂教會の信仰箇條、或は教義を固執するの謂にあらずして、信ずるの力、即ち神と相交通し生活する力の謂たるや知るべきなり、故に教會の教義、信仰箇條を抛棄排斥して、信奉せざる者も信仰あるの基督教徒たるに障礙なし。されは信仰の事に於ては、何をの疑問に非ず、如何にの疑問にあり、即ち人の信仰する所は何なりやに非ならず、其の信仰力の如何にあり、故に不信仰と稱すべきものに至りても、亦た彼此の教義を智識上固執し得ざるの謂にあらずして、神と相交通する能はざると、神を遠かると、神と其の救済に對して冷淡なると、等心の空虚なるを云ふなり。

信仰の結果

一、信仰は確然不動の道徳力を生ず、蓋し眞實に悔改の痛苦を嘗め、信仰に達し、神と共同の生活に居るものは罪惡を嫌惡するの念、其の心底に發し、神との交通は之れに與ふるに罪惡を避除するの一大勢力を以てすべし。千百の計畫も自己の力に依頼せば、畫餅に屬す知るべきのみ、宗教的の生命活潑なるに於ては、道徳は信仰の結果として自然に生ぜん。世人の往々誤解するが如く、道徳なる者は宗教の基礎をなす者にあらず、宗教は實に道徳の根本たるものなり。

二、信仰は安心の泉源にして、凡百の困厄窮迫に遭遇するに際し、殊に死に臨むと雖も、恒に精神の平和を維持する者は信仰なり。

三、信仰ある者は其の信仰に因りて神より最大幸福を受け、其の心情常に

に照みたちん、然れども此の無上幸福の感情は各人自ら其の心中に感知すべきものにして、筆紙の能く之を寫し得べきものにあらず、抑も人は信仰に依りて神に粗遠なるの境遇を化脱し、神に接近するの境遇に移り、又た道徳的束縛の状況を出で、神子たるの自由に入らん、即ち信仰ある者は自ら奮て神と合意す、故に神の命する所なる道徳を履行するに當りても、以前の如く其の内心之れに抗抵し、唯た嚴命に恐懼し、止むを得ずして之れを爲す、所謂他動主義にあらず、其の之れを爲すは神と相交通して神聖を得たる人心の自然に生ずるの意思に出づる自主主義なり、宜なる哉、信仰の人を救濟するや、ポロは曰く、人は信仰によりて義とせらるると。

第八章

更生を補ふもの

更生の事たる固より突如として來り、一舉にして完備するものにあらず、其の一舉に來るものは覺醒のみ、覺醒とは道德宗教の心の警醒にして、是れ更生の發端なり。故に人の更生は一定の瞬間にありと信するは甚だ淺薄の見たるを免れず。ルイナル曰く、吾人は基督信徒として常住にある者にあらず、常に發達しつゝあるなりと金言と云ふべし。されば更生も亦た常に之れを再びするを要するものにして、人基督信徒となると雖も、尙ほ肉軀を以て生存し、荏弱の人間たるを免るものにあらずれば、再三、再四、常に其の内心の改良の爲めに奮心努力せざるべからざるや明けし。吾人此の更生の反覆を稱して「聖め」と云ふ、思ふに「聖め」は死に至りて始めて靜止するを得んか。

上卷 教理約説終

下卷 倫理畧説

緒言

樂世説は曰く、天下のもの一として善からざるはなく、美ならざるはなし、人間たる者は世界に在りて其の生活を樂しみ、愉快を貪るも亦た宜ならずやと。之れと全く反對の地位に立つ者を厭世説と云ふ、曰く、舉世皆惡ならざるはなく、醜ならざるはなし、苦痛は世を填充す、人の生活亦た固より非なり、人生の連續するは痛苦の環鎖の連綿たるど何の異なる所かあらん、人間たるものは宜しく世を捨つべし、速かに生活を化脱する者は福なりと。

夫れ黨せず偏せざる者は基督教なり、基督教の主義たるや樂世説にもあらず、厭世説にもあらず、其の中道を行き、中庸を持するものなり、曰く、痛苦、快樂、幸、不幸、共に皆此世に現存し、其の調和宜しきに合ふ、是れ世の

實想なり、人間たる者は人生の快樂を貪るのみにして、生活の嚴肅を忘却せば不可なり、然れども亦た世を厭嫌し、失望、落膽、煩悶に下るべからず、基督信徒たるものは印度の佛者の如く、遁世、棄世を主義とせず、世に開明を到し、之れを充實するに神の靈を以てし、世を變して幸福の輻輳する所たらしめざるべからずと、故に基督教は吾人を教導するに世を遁れ世を捨つるを以てするものにあらず、吾人を激勵し、教訓するに耶穌基督の精神を以て世に勝ち世を畧するを以てす。

基督教の倫理は吾人に教示するに、吾人は我生活中に於て如何に自己と世界とに對し處す可きかを以てす。

第一篇

自己に對するの義務

吾人若し自己に對するの義務如何を知るに明瞭ならんと欲せば、宜し

く先づ吾人は財寶に對して如何なる位地に立つべきやを知るにあり。之れを括論せば曰く、基督信徒たるものは財寶を輕侮すべからず、又た偏重すべからざるなり。

第一章

生命、健康

生命、健康は吾人の財寶なり、苟くも基督信徒たる者は神の吾人に恩賜せる生命、健康なる貴重の財寶を羽輕し、猥りに其の健康、生命を賭し、輕しく危難に走り、或は淫樂、放逸に流れ、慾情を恣にすべからざるなり。然りと雖も復た猥りに其の生命、健康の爲めに居常、戰々、競々として安する所を知らざるか如きとある可らざるなり、宜しく神聖、高尚なる目的の爲めには、自若として健康をも、生命をも犠牲にし、人世の爲め、或は我が確信の爲めには死を見ると、猶ほ歸するが如くならざるべからず。

基督信徒とは則ち耶蘇基督に師事するものと謂なり、故に信徒たる者は宜しく耶蘇基督の道德上潔白にして、優美、高尚なるを學び、靡徳を惡み、之れを責めざるべからず。夫れ基督の名を負へる者は單に其の行爲に於けるもののみならず、言語、思考に於ける所のものに至りても一介の醜穢を許さず、斷然之れを根絶し、謹慎能く其の身を改脩し、人を誘惡、腐敗せしむるの情慾的誘導は悉く之れを排斥するに躊躇せず、之れに勝つゝの豪氣を養ひ、心裏の蘊底に起るの惡思想も聰明、萬知の神は必ず之れを知り玉ふを顧慮せざるべからず。然り而して基督信徒の道德心の鋭敏なるは、唯だ醜穢の言語を聴くに當りても、堪ゆる能はざる不快の情を感ずるに至らざるべからざるなり。思ふに一個人たると一國民たるとを問はず、其の身体力、精神力の強弱、剛柔は其の道德力と相關するや甚だ深く、道德力消亡して個人斃れ、國民低ふは決して稀有の事に

あらざるべし。若し夫れ真正の基督教にして一個人或は一國民の心中に活潑をならんか、心意、品行の潔白、勢力、隆盛、福祉、平安は期して待つ可きなり。

第二章

浮世の資産

我浮世の資産亦我財寶なり、基督信徒たる者は金錢、田地、居宅等の如き浮世の資産に對しても亦た心して之れを輕賤し、或は猥りに保惜せざるを要す。吾人亦身軀的の生命を有す、誰れか浮世の財寶は無用の長物なりと云ふを得んや。

故に吾人は此れ等浮世の財寶を輕々に放棄、蕩盡すべからず、基督信徒たるものは惰慢を謹み、黽勉、節儉は以て其の義務と爲すべき所なり、然り而して人或は一方に偏し、此れに反對したるの惡弊に陥ると易し。惡

弊とは何ぞや、曰く、浮世の財寶を無上に敬愛し、反て其の心を財産の所に歸し、貪欲吝嗇を是れ事とし、其の努力して盡すべき所のものは資産家となるよりは他に高尙にして貴重すべきものあるを知らざるに至る是れなり、謂つ可し甚だ非基督教的なりと。浮世の財寶固より人世に必用のものたるを免れずと雖も、未だ以て我生活の目的物となし、人世の至聖、至貴の物と爲すに足らず。吾人は之を以て單に我身軀の生存を保持するの方便物となすのみ。

其れ然り基督信徒たるものは貧困にあるも、富貴にあるも恒に其の心中平安にして、彼れにあるが故に煩悶せず、此れにあるが故に傲慢ならず、又た其の幸福の變化に遭ふも敢て失望、落膽せざるなり。蓋し基督信徒が其の生活に於て眞正の價値ありとなし、眞粹の財寶となす所のものは、精神的の財寶にして、金銀の如き生活の福祉の爲めに欠くべからざるものにあらず。

第三章

名譽

名譽も亦た我財寶なり、人の之れを輕賤し、偏重すべからざるは前記の財寶に等し。

夫れ名譽なる者は固より故意に製造、作爲すべきものにあらず、人各其の行ふ所により自然に己に歸するの報酬なり。吾人は名譽を貪り、名譽に吝なるの邪念を絶つを要す。人苟も貪名なれば或は其の目的とする所を達するを得ん、然れども名を好むの人は焉ぞ之れを以て満足する者ならんや。一將功成るの時は萬骨枯るゝの時にして、貪名の人は幸に名譽を得るありとするも、之れと同時に嫉妬、憎惡は四方に起り、其心亦た傲慢に流れ、殘忍となり、不平は止まる所を知らざるべし。

又た基督教徒たる者は宜しく謹みて虚飾の風を捨てざるべからざるなり、外形の脩飾を華美にし、而して名譽を得んと妄信する者は抑も愚者の極のみ、徒らに虚飾を事とするは眞實の行爲に因りて以て名を爲す能はざるものが、奇才をしぼりて出たすの謀計に過ぎず、弱小人の徵候と謂ふ可し、然れども生活の爽快を味ひ、身體を保養し、罪惡なく潔白なる快樂を爲すは基督教徒の固より爲し得べき所にして、鬱々として爽快の生氣なきは其の本色にあらず、基督も亦云はずや悦ぶ者と共に悦ぶべしと、然り而して基督教徒の留意して必ず忘却すべからざるものあり、快樂は容易に人を誘惑して放恣亂暴に流れしむる是れなり、基督教徒たる者實に能く之れを曉知す、故に快樂を爲すの後復た悔る所なきを得るなり。

第一篇

世に對するの義務

第一章

他人に對するの關係

夫れ基督教主義道德の金科玉條たる者は、汝自身の如く汝の隣人を愛すべしの一語にあり、愛敵の主意亦た自ら愛隣の内においてと謂つ可し。思ふに人間社會に於ける禍害の因りて來る所以は多く愛の戒を忘却するにあり、品級、資産、教育、國風、民種、宗教の不同は常に不和、争鬭、鬩牆の原因をなすにあらずや、然れども此の禍害不徳たる決して基督教徒間に行はるべきものにあらず、斯教の本旨となす所は吾人は皆な兄弟姉妹なり、神の子なり、而して人種、品位に於て差違する所あるなしと唱道する所を實行するにあり、故に大聲疾呼して曰く、富者は宜しく貧者を愛すべし、而して貧者も亦た富者を愛すべし、貴族は宜しく賤民を愛す

べし、而して賤民も亦た貴族を愛すべし。智者、學者たる者は宜しく愚者、不學者を愛すべし、而して愚者、不學者も亦た智者、學者を愛すべし。一國民は宜しく他國民を愛し、基督信徒たるものは國界を以て復た其の愛の限界となすべからず。一民種亦た他の民種を愛し、基督信徒たるものは宗教の異なれるを以て愛を變せず、非基督信徒をも愛すべし。他愛は實に憐恤、親切、勤好、正直、寛容、柔和にして又た好んで和し且つ唯だ真理を是れ求む。

他愛は復た吾人に求むるに他者の生命、健康を尊重し、之れを輕忽にせざらんことを以てす。故に基督信徒たるものは他人に強ゆるに其の健康を毀損するが如き事を以てせず、之れに反して、病者、不具者を保護、養育するは其の神聖の義務となす所なり。而して弱者、病者の如き者の爲めに愉快の生活を送らしむるの養育院等の如きものを設置するは其の

奮て務むべきの事業となす。特に基督信徒は其の男女を論せず、病者の看護を爲して古來より甚だ大なる所あり、蓋し基督信徒たる者の畢生忘る能はざる所のものは耶蘇基督は賤者、病者、瀕命者の知友たりしとにあり。

又た基督信徒たる者は他人の財寶、資産を保護し、其の増加を悦び、不義、不徳の之れを毀害せざらんことを勤め、常に正義、寛大、慈善の人たり。又た他者の名譽に至りても其の毀損を防ぎ、其増加を欲し、猥りに人の罪を、定むるを恐れ、猥りに他人の罪過を裁定するを厭ひ、他人の善事を悦び、能く他者と親み、之れを信任して猜疑するとなからん、蓋し人の品性如何を知らんと欲せば、其の他人を批評するを聽くに如くなきなり。然り而して基督信徒たる者は唯だに其の隣人の身軀的安寧を増進せんとを冀望するのみならず、又た爲めに其の精神的安寧、特に其の道徳

宗教上の幸福、安寧の増進を計からざるべからず。且つ其の勤勉従事する所は單に他者を誘惑するの恐れあるものを剪除するのみならず、好んで能く他を忠諫し、其の罪惡を行ふも敢て意とせざる冷淡の心を警醒し、之れを啓發、教導するに至善、神聖の道を以てし、常に此れを獎勵せざるべからず、而して之れを爲す最良の道は則ち己れ自ら進んで好模範を示すにあり。思ふに徳義信仰に關して他の先導者たらんと欲する者は、必ず先づ自家の清淨、潔白、篤信を得るにあり、故に基督信徒たる者は宜しく先づ自ら奮勵、警醒せざるべからざるなり。

第二章

人間社會(家族、國家)に對する基督教の地位

夫れ人間なる者は社會的の生存者なり、獨立、獨歩、他人と交通する所なくして生活し得る者にあらず、必ずや他と協同、交通して生活せざるを

得ず。故に人間の組織する社會即ち家族、國家、教會の如きは皆な人世に必須のものにして之れを形成するは神意に出づと謂つべきなり。されは基督信徒たる者は好んで此れ等の組織體に加入し、之れを保護し、其利益を計り、之れが爲めに盡力し、且つ之れが爲めには其の身命を抛つと羽毛の輕きが如くならざるべからず。彼の基督を見ずや又た見ずや之れに師りし其弟子を、彼等皆な其の死生を賭するも尙ほ全社會の安寧、幸福の爲めに雄奮努力せしにあらずや。

其一 家族

社會に於ける組織體の最少なる者を家族となす、而して家族の基礎は原と夫婦にあり。

抑も夫婦なる者は人性の自然に出づるの組織にして、人類の永續、保存する所以なり。之れを基督教以外に徴するに世多くは夫婦の制を以

て單に肉體的、慾情的の結果なりと做すと雖ども是れ大に非なり、基督教は頗る夫婦の制の神聖なるを説けり、其の稱道する所を以てすれば曰く、男女は世に於て其置地を異にし、職分を分つと雖も、其品位に至りては毫も差異あるとなく、夫妻たる者の義務は互に相補ひ、相扶助し、相商議し、相慰藉し、相使事し、相宥免するにあり、性に男女ある如く、其の義務能力に至りても亦た各其の長短ある知るべきのみと。

其れ然り夫婦なる者は豈に唯だ身牀の結合のみとなすべき者ならんや、宜しく全生活間に於ける精神の結合たらざるべからざるなり、基督教の主義を以てすれば夫婦の縁は決して再び分離すべきものにあらず、只だ死ありて能く之れを解き得るのみ、多妻は其の決して許す所にあらず、多妻の制を以て道徳上卑賤、未開の狀態となす、其の許す所は唯だ一夫一婦にあり。

親の義務 基督教は兩親に命じて曰く、其の兒子の爲めに盡すべきは唯たに兒子の身牀の安寧、福祉を目的となすにあらず、宜しく其の精神の爲め大に爲す所あるべしと。抑も兩親たる者は其兒子を教育するに宜しく己れの爲めに盡し、己れの爲めに營み、己れの爲めに養ふ者を得るの目的を以てするとなく、其の兒子の爲めに其兒子を養成するを以て目的とせざるべからず。換言すれば兒子の教育は其の兩親の自利主義に出づべからざるなり、兩親が其兒子を教育するに當り、墨守すべきの主義は實に其の子をして、己れよりも善良にして、學識に富み、敬虔の心あるものと育成するにあり。

子の義務 子たる者は深く其の父母に對して感謝、尊敬、順從の義務あるを知るべし。必ず此の義務を盡すに當り多きに過く等と思惟し、怨恨、無禮の心あるべからず。

兄弟姉妹の義務 は温順、和親、友愛にあり、特に兄たり姉たる者は宜しく弟妹の教育に關しては兩親の補助者となり、弟妹の好模範となり、先導者となるべし。

家僕に對するの義務 は之に對して親切に慈愛を加へ、之れを輕視せざるにあり。人宜しく其の僕婢を見る我家族の如く、彼等をして其主家を見る恰も己れの父母の家の如くなるに至らしむべし。又た能く其の僕婢の命運に同感同情を表し、之れに仁恤を加へ、彼等をして其の主家にあるの日には己のが憂樂を發するものにあらざる等のとを思惟せしむるの無情に陥るべからず。人宜しく僕婢の腑中亦た不朽の靈魂生存するを想ふべきなり。

されは僕婢たる者も亦た其の主人の善と不善とを問はず、之れに事へて忠實なるべく、主家の事物を視る自己の物の如くなるべし。

夫れ基督教的の家族は一小天國を形成する者にして、神の諸力の實際に行はるゝの地なり。幸福なる哉神の靈を以て基礎となすの家、幸福なる哉基督教の愛を以て相結合するの力となすの家、如此の家ありて始めて能く其の家族の者をして道德上堅固の地盤あらしめ、幸福なるの父母あらしめ、善良、温順、敬虔なるの子弟あらしむを得べし。然り而して神の道ドクトリンは一家の中眞となるを要す、蓋し道德と宗教とは神の道より出づるを以てなり。此の家族あり而して後ち其國民亦た高尙、有爲なるを得ん、何そや家族は國家を形成する所以の基礎なればなり。

其二 國家

基督信徒たる者は順良の國民たるべき者にして、其の國體の何たるを問はず、規律ある政府と其の法律には必ず服従するの義務あり。基督教的國家は單に警察國即ち唯た外面上の秩序、安寧を守るの國たるべき

ものにあらざして、文明國即ち其の國民の身軀并に精神の安寧を保護し、總て此の安寧を破壊する者を剪去し、之れを増進する者を獎勵し、且つ其の知識たり、情感たり、意志たるを問はず、其の國民の教育に注意し、其の智識と品性の養成に勤勉なるの國家たるべきなり。

基督教信徒たる者は國民となりては其國を利益し、國家全軀の幸福の爲め努力して、惰慢なるべからず。若し其の國家の制度、法律にして改革を要する所のものあらんか、宜しく之れを改革するに平和にして、法律的の手段を用ひ、決して暴力的改革を謀るべからず。

又た基督教信徒たる者は私なきの事業をなして以て其の祖國を愛せざるべからず、宗祖基督は實に大愛國者にして、其の國民の爲めに救済の道を宣傳、教示し、之れが爲めに枕を安せず、痛苦を嘗み、國民の不幸と其の精神上の衰微、窮困を見、爲めに流涕潸然たり、是れ皆な其の愛國の眞

情に發する者にあらざして何ぞや、基督の信徒たる者焉ぞ此生死を抛て、祖國の爲め盡くす所なくして可ならんや。

其三 國家に於ける品級の關係

已に人類あり、國家あり、貴賤貧富の差、職分の別あるは復た數の免る能はざる所にして、階級の等別は人間社會に跡を絶つの日なからん、されば基督教は此の差別の廢滅を希望するものに非らず、其冀望し、爲めに盡力する所のものは警察の力も亦た制度の改革も共に成功し能はざる階級の差異あるが爲め生ずる社會の害惡を除去するにあり、基督教は諸等の階級職分の者を結合するに愛の精神を以てし、教誨するに人間の福祉は外物に因るにあらざり、其の位地に基くにあらざり、眞正の幸福即ち基督教に所謂精神的財寶なる者は人の貧富上下の別なく、各人己が所有となし得べきことを以てす。貧者を誡めて曰く、嫉妬、惡意を挾む勿

れど、富者に命じて曰く慈善謙遜なるべしと。若し夫れ基督教にして眞實社會に實行するの曉に至れば、社會の究困憎惡貧民の不平、富者の傲慢、無慈悲は頓に悉く霧消し去り、人皆互に兄弟の交をなし、和氣霽々の裡に一家團樂たるの和樂あらん。

權力を以て或は政治家の技倆を以て、社會に於ける階級の差異より生ずる不平、不和、争鬭、紛亂を治せんと欲するは偶、以て徒勞に屬す。道は唯だ一なり、道德宗教上の改革を爲し、國民に與ふるに眞の生命を以てし、個人と社會に注入するに基督教の信仰を基礎となすの愛を以てするの道あるのみ。基督信徒たる者は平和の人なり、其の身如何なる境遇にあるも争亂を企つる者にあらざるなり。

其二 教會

宗教の何たるを問はず、其の信徒たる者は必ず一團體を形成す、基督教

亦た人世中に宗教的團結、即ち教會を組織せり。蓋し教會なる者は宗教的生命の保護者として必用欠くべからざる所のものなり。世上時に一人獨行して何れの教會に屬せざるも能く善良なる基督信徒たるを得る者あるべし、然れども人若し教會に屬する事なからんか、其の信仰は偏頗となり、數多の弊害を醸成し、或は信仰萎微、衰滅するに至るの不幸あらん。宗教的團結あつて始めて人世に宗教的生命を覺醒し、之れを獎勵し、之れを維持し、青年、少年輩を教育するに宗教を以てするの人は出ずを得べし。此の理由あり、故に吾人基督信徒たる者は宜しく教會に屬すべく、又た教會會員たる者は己が教會の利害を顧慮し、教會の事業は常に熱心之れを翼助するの義務あり。殊に禮拜式に出席し、聖式に與るは其の盡さざるべからざるの義務なり。然りと雖も教會も亦た人間的組織なるを以て聖人或は更生したる基督信徒のみの團體にあらざ

るを記憶せざるべからず。教會なる者焉。直ちに神の國と云ふべき者ならんや。只目的とする所は漸次神國となるにあり。猶信徒の最大目的となす所は神の完全なるが如く完全となるにあるが如し。

第二篇

信仰を強むる特別の方法(聖式、安息日、祈禱)

を論ず

特に聖書に記載せられ、基督信徒の日常見すべき神の言葉の外、尙ほ信仰、徳義を強堅、健全ならしむる道あり、之を聖式、安息日及び祈禱となす。

第一章

聖式を論ず

聖式とは聖洗禮式、聖晚餐式を云ふなり。

其一 洗禮

洗禮とは基督教信徒たらんと欲するものに其の基督教に入るに當り授けらるゝ一種の宗教的儀式にして亦た聖式の一なり。聖式とは基督教自家の創設せし宗教上甚だ幽玄にして深意ある表識的儀式の謂なり。傳に曰く、基督洗禮を創設せしに當り左の數言をなせりと(馬太傳二十八章十九、二十)

爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし、且わが凡て爾曹に命せし言を守れと彼等に教へよ。水能く人の身軀を洗滌して以て清淨潔白ならしむ。洗禮式に於て水を注ぐは人其心を清淨にし、舊惡の人を脱下し、更に新善の人と化し、潔白なる基督信徒と變ずるの意を表するものなり。洗禮は實に更生の表識なり。使徒保羅曰く、洗禮は更生の沐浴なりと。

其れ然り洗禮は受洗者が基督教會に入るの聖式にして、洗禮を受くると同時に受洗者は基督の教會の人たる權利と義務とを盡く其の身に負ひ、洗禮は之に盟約するに福音の諸福祉を以てせん。洗禮固より超自然的、魔術的のものにあらず、然れども復た單に一箇の表識、即ち虚無の一儀式たるに過ぎざるものにもあらず、宗教上幽遠、深味ある神聖の儀式にして、人に與ふるに嚴肅の諫告を以てし、其生活間に於て混々流れて盡ざる精神的大勢力を以てすべし。

基督教會の初代に當りては大人のみ獨り受洗するの慣例なりしと雖も、其後漸く見子をも亦た受洗せしむるの風習普く起れり之れ大に正當の事と云ふべきなり。世上の宗派中或は唯た大人には受洗せしむべしと雖も、見子は尙ほ未だ洗禮の何者たるや其の旨意のある所を了解せざるを以て之れに授洗するは非理なりと論する者あり。然れども吾

人は未だ此の説の可なる所以を知らざるなり、試みに見子をも亦た洗禮し得べき理由を掲ぐれば左の如し。

一、見子たる者も亦た宜しく此の世の生活を扱むると同時に基督教の中に入れられ、神の保護と其の愛に任せらるべきものなり。
 二、見子たる者固より洗禮の何者たるやを了解する能はず、故に復た其の受洗の時に當り、自ら神の子たる約束を爲す能はず、然れども洗禮の保證人即ち洗父なるものありて見子に代り、爲めに約束を爲し、見子を教育するに基督教の旨意に従はんことを神と教會に告ぐを得べし、而して見子成人するの時は、昔日其の洗父が代りて約束せし約束を自ら受領す、是に於て洗父の義務成り、爾後洗父の責任なく、受洗者自ら道德宗教上の責任を負ふに至るべし、此の前後の區別を爲す者を堅振と云ふ。

三、若し夫れ兒子にして此の生活に出づると共に授洗せられんか、是れ
 兒子畢生の爲め、常に神に忠實なるべきことを諫告するの大勢力となら
 ん、蓋し後日に至り、道德的覺心、兒子に醒生せば、其の幼少の時より業に
 已に神の子とせられしを曉り、畢生神の子たるに負かさざらんことを心に
 銘じ、常に警醒し、献身の心を奮起せしめん。
 四、基督自家も亦た兒子を己れに連れ來るべしと諭告し、且つ天國は兒
 子に屬すと云へり、
 要するに、兒子の洗禮に當りて、神聖の大責任と義務とを負ふ者は、洗父
 にして、洗父は爾後、兒子の道德宗教的教育を負擔せざるべからず。

其二 聖晚餐式

主基督賣さるゝの夜、晚餐式を創設なし玉へる言に曰く、取て食せよ、此
 は爾曹の爲めに學るゝ我體なり、而して嘗な此の杯より飲め、此は爾曹
 の罪の爲めに流さるゝ我血なりと、後ち其の弟子等にパンと葡萄酒と
 を與へり、是れ聖晚餐式の濫觴する所にして、パンと葡萄酒とは耶穌基督
 の體と血とを表識する者とす、晚餐式は則ち死を以て人世を愛したる
 耶穌基督の献身的の死を紀念するの式なり、故に晚餐式の深意のある
 所は有形的にあらざ、無形精神的なるや知るべきなり、今之を約説すれ
 ば左の如し、

- 一、晚餐式は耶穌基督の死を紀念するの式なり。
- 二、基督信徒たる者は晚餐を受くるに際し、唯だ基督の死を追想するに
 止まらず、能く基督の人となりて、達觀し、心に於て之れと合一し、且つ基
 督と合一するに因り、其の道德宗教的生命を一新せざるべからず、故に
 晚餐式は神の祐助により、之れに與かる者の爲めに、悔改、信仰の復興、信
 仰の奨勵の式たらざるべからず、故に又た晚餐式は人と神との交通、結

合をして更に強固ならしめ、恰も食物の身軀を強健ならしむるが如く、晚餐は我愛をして更に猛盛ならしめざるべからず。要するに晚餐式は基督教に於ける祝祭中の其の最たるものとす。

三、晚餐式の事たる甚だ重大のものにして、其の良意のある所實に玄之又玄なり、故に適當なる準備をなさず、宜しきに合はざるものは決して此の式に與かるべからず。準備とは何ぞや、曰く、謹嚴内省、罪の告白、懺悔、正直、熱心の祈禱是れなり。固より罪人と雖も亦た晚餐式に與り得べしと雖も、宜しくまづ其の罪を信實に悔ひざるべからず、蓋し宜しきに合はず、浮輕の心を以て神聖の事に與る者は、之れを贖すの罰ある豈に唯た晚餐の事のみならず、然らんや。

四、晚餐は愛の餐なり、故に晚餐を食する者は先づ其の敵の罪を宥恕し、或は人を忿怒し、或は憎惡するの念を斷たざるべからず。若し然らずし

て忿怒憎惡の心あるものは之に與るを得ざるなり。

夫れ晚餐の事たる徹頭徹尾精神的に解すべきものなり、然るに「カトリック」教會は曰く、パン及び葡萄酒は祭司の權力に依て眞に耶蘇基督の體と化し、血と變じ、信徒たる者は之れを食飲すと、然れども之れ既に宗教革命家ツウ・カングリーが言ひし如く、誤謬の大なるものなり。パンと葡萄酒とは實に耶蘇基督の跡と血とを意味するものにして、其の表識たりと云へども、眞に跡と血たるものにあらず。晚餐式一に Communion 即ち共同と稱せらる、是れ晚餐式は共同の愛餐なるが故なり。

晚餐式の吾人に及ぼすの力は左の如し。

- 一、吾人の道德宗教的生命、吾人の耶蘇基督及び神との共同力を増進す
- 二、我が同胞に對する愛を奨勵す

故に基督信徒たる者は時々晚餐式に與り、以て其の神聖、謹嚴を嘗めよ

るべからず。第二章

安息日を論ず

古來猶太人民は聖書の創世記事に従ひ、第七日(我土曜日)を以て安息の日、並に神を崇拜するの日となし、此の日を祝せり、又基督信徒は週の第一日即ち日曜日を安息及び拜神日とし、祝せり、蓋し福音書の記載する所に依れば、基督は此の日を以て復活せしが故なり。

吾人は日曜日を以て二の意あるものとす、曰く、安息、曰く、拜神是れなり。

第七日に於ける安息は人性の自然に基くものなり、故に復た神の意志に出づるものと云ふべし。此の日に於ける基督信徒の義務は安息にあり、安息とは職業をなさないの謂なり、世上偶所謂止むを得ざるの業な

るものありて、安息日に當り業を爲すを許容し得るものありと雖も、之れ極めて稀有の事たらざるべからず、思ふに日曜日に於ける安息の戒は世人未だ普く基督教を奉せず、爲めに無数の誘悪危険信徒を毀壞するの地にあつては、其必要更に甚だ大なり。

基督信徒の安息日に於ける義務は第二拜神にあり。

週日に於ては人各其職業に趣き、東奔西走し、其の心を俗事に勞し、爲めに其の思想をして神聖の事に遠からしむる者、少なしとせず。されば日曜日に當り、其の心をして神に向しむるは、甚だ必要の事とす。故に基督信徒たる者は、此の日に當り怠たる事なく、常に禮拜式に臨み、又信仰を篤厚にし、道徳を高尙ならしむるの書を讀まざるべからず。安息日に於ては、人心を奨励して、善良神聖に進ましむるものは、盡く之れを爲し得べしと雖も、人心をして直ちに神に向はしめざるものは、盡く之れを

爲すを得ざるなり。杖を曳て壯大美麗なる自然の中に徜徉し、或は善良の朋友と相會し、神を念し、宗教道德の事を談するが如きは、此の日に於て甚だ適當の業とす。
夫れ安息日の徳たる人をして無限の幸福と平和を得せしむるものにして、人若し眞に安息日を祝せば、其の全週是れが爲めに幸福なり、身軀の事業も精神の事業も共に壯快ならん、然り而して日曜日に於る最大要事は、人其の基督教の同胞と共に神を拜するにあり。

第三章

祈禱を論ず

祈禱とは人の神に通ずるの言語なり、人各其心の感動する所に従ひ、祈禱を以て神に接近す、故に或は訴ふるものあり、或は願ふものあり、或は謝する者あり、基督信徒の生活中に於ける最嚴最肅にして、又た最聖、最

美なるの時、は祈禱の時、に如く、はなし、祈禱固より言語に發することなく、精神の感動して高く、神に向ふ無言の中にあるとを得べし。
祈禱の功力たる、決して之れを外形上に考ふべきものにあらず、祈願の達するは神外形的に人間の私欲より出づる希望を成就せしむるの謂にあらず、其の通達するや、神力祈願者の精神に加はり、之れをして強健ならしめ、之れをして奮激せしめ、之を慰藉し、或は之れを善良、神聖の事業の爲めに驟起せしむるにあり、されば祈禱は、凡百の誘惡に對する最上の武器にして、又た死床に於る無上の慰問者なり、故に眞實熱心に祈禱し得るものは、祈禱を以て萬不幸、萬苦痛に抗する最良の兵器とせん、然り基督教徒たるものは、一日も祈禱なくして可ならんや、朝には必ず祈禱を以て其の日を迎へ、夕には復た祈禱を以て之れを送るべし、吾人は實に祈禱に依て、以て神に相交通す、即ち吾人は信するなり、吾人が他

人の爲めに爲すの祈禱之れを他人の爲めにするの祈禱と云ふ。人猥りに祈禱に依り神に求め、其欲望する所のものを盡く得ると妄信し、之を濫用すべからず、祈禱の聞かるゝは神の聖靈により、祈禱者に授けらるゝ精神上の反答なり、又祈禱を爲す者は其心卑賤の慾心を去らざるべからず、實に完全の祈禱者は是れ完全の基督信徒なり。祈禱の術にあらざると、恰も子の母に於る、或は母の子に於る、愛より出る願詞の術にあらざると、恰も子の母に於る、或は母の子に於る、愛より出湧出する所のものなり。

第四章

來世に就て

熟ら古來諸宗教の現象を観察するに、其の何宗教たるを問はず、皆な靈魂の不朽を信せざるはなし、印度、希臘、埃及等には輪回説あり、ペルシヤ、

猶太等には復活説あるが如し、基督教も亦た靈魂不死を信ずる者なり、夫れ未來の事たるや、經驗の及ぶ所に非ず、故に想像、妄像の説、百出し、天堂地獄の形容甚だ盛なり、然れども吾人は宜しく猥に妄像を逞ふせざるを要す、吾人は未來の存在を信ずるを得べしと雖も、其の如何なる状況なるや未だ知るべからざるなり、思ふに死後に於ける個人的精神の生存は、智力の辨證能く之れに信を置くに足らしむを得べしと雖ども、決して之れを確然不拔たらしむ能はざるなり、然り而して之れを辨證するや、精神の統一と其の非物質的とを以て論據となすの形而上論あり、人生に於ける命運の不平等は來世に於て絶對的に平均せらるべしと論するの道德論あり、創造の目的は今世に於て究極點に達せざるを以て、來世あらざるべからずとなすの終局論あり、靈魂不朽の信仰は地上至る處に現存するを以て、此の信仰には客觀的眞理なからざるべか

らずとなすの歴史論あり。吾人は更に尙ほ我身體を形成する所以の物質は常に新陳代謝し、一日と雖も常住にあるあらざるも、精神的我は常に依然たるの事實をも精神不死の證論となし得べきなり。然りと雖も吾人は我精神の未來の存在に關しては一も經驗する所なく、故に復た學理的認識の基礎となし得べきものを欠くを以て前述諸證論の如き皆な嚴密なる學理的の者とはなすべからず。既に認識の範圍を脱す。故に復た不死の反對論を立てんこと難し。蓋し其の證論せんと欲する所のものは既に其の預定する所なればなり。況んや既に有限の中にありて無限者を感じしたる宗教的心情に反對を試るは決して爲し得べき所に非らざるなり。夫れ神と人との信仰の交通協同は生にあるも死にあるも決して破壊せられ能ふべき所のものにあらざり。約翰傳に曰く「我言をき、我を遣し者を信ずる者は永生を有ち且つ審判に至らず死よ

小生に遷れり」と五章廿四又たパウロが羅馬書八章卅五、卅九に記せし所は基督信徒たる者の死に於ける慰藉と希望とにして千載不磨の金言なり。吾人が地上の生活に於て已に業に其の大本なりとし、經驗曉知せし神の愛は吾人の未來に關する最大慰藉にして之に勝る不死の證據あるとなく、又た之れを破壊し能ふものあらざり。蓋し神の愛と其の正義とは人の死と共に滅するが如き薄弱有限の者たるを得ざるなり。嗚呼人の死を救ふものは智識的辨論にあらざりして熱心なる信仰力なる哉。

ズペリンテンデント、ドクトル、デル、テオロギー、
ウナルフリード、スピンチル先生の略傳

向軍 治謹紀

先生は瑞西國「チエリッヒ」府の人なり其の先は「フゲノツ」の一人にして佛
蘭西國「マルセイユ」近傍の土豪なりしが第十七紀の初新教徒迫害の盛
なるに方たりて田園の廣と財貨の阜と悉とく之を遺て、禍を此府に
避け子孫世に居り以て先生の考に至るまで徹にして顯はれざりき
考は「チエリッヒ」府「デカール」にして有名なる實際的神學者なりしが
先生の我邦渡來の途に上るに先ちて逝けり妣は其後常に多病にして
遂に去年の冬を以て亦た黃泉の客となれり先生は其長子にして西曆
一千八百五十四年十月を以て生れ小學科を卒へたる後甫めて十二歳
にして其の地の中學に入り一千八百七十三年成績拔群にて其の全科
を卒はり直に「チエリッヒ」大學に進みたり先生時に年十九幼少より神學

を修めんとするの志堅く拮据四年の後二十三歳を以て神學全科を卒業し「スマーテックサーメン」高等官の試験と云ふが如しに及第して「プファルン」たるの資格を得たるは實に一千八百七十七年なりとす先生其の學に於て猶ほ造詣する所あらんことを務め且つ瑞西國宗教改革史の材料を蒐集せんと欲し「アデーヒンゲン」「エナ」「ライプツヒ」「ハルネー」「ベルリン」「ボン」「ストライスブルヒ」「ハイデルベルヒ」等の獨逸國諸大學及び瑞典和蘭等の諸國の大學を歴訪し諸方の圖書館に就きて宗教改革に關する書類の徵證に従事したり蓋し和蘭國の如きは宗教改革の歴史上瑞西國と最も密接の關係を有するが故なり郷に歸るの後「ウーヴラトヴォール」の傍「ディンハルト」なる官設教院の「プファルン」に任ぜられたり此の教院は「ツ井ングリー」の寺なりと云ふ先生此の教會を牧する七閱年善く全教會員の心を得て其長敬愛慕する所となりたり職務の餘暇常に意を勤學に留め殊に精を基督教古物學に凝らし年々諸方

を遍歴して専ら其研究に従事し就中一千八百八十三年其親友「ストライスブルヒ」大學の教授教會歴史學者「ドクトル、ルチウス」氏と共に以太利國に遊び「シ、カ」島を経て亞非利加洲の北方「トニス」國に航し南方「サハラ」の大沙漠の邊に至りたる行の如きは先生の最も意を用ゐたるものにして羅馬國の古蹟と回々教國の景況と探り盡して得る所甚だ多かりしと云ふ是より先一千八百八十二年「ドクトル、ブリス」「プロフェツツ」「イル、ケツセルリング」「プロフェツツ」「ニッポルド」「プファルン」現今「プロフェツツ」「ドクトル、フルン」諸氏と相共に一傳道會を起さんとを議し其計畫に盡力したり之を獨逸普及福音新教傳道會の起源とす而して其傳道區は主として印度支那及び日本と定まりたり蓋し先生は夙に廣く基督教外の宗門の古來の沿革及び現今の景況に注目し殊に印度に關しては其大學に在るの日既に知を印度土人及び印度の學者に求め或は音信を通じ或は相往來し又印度の英字新聞

雜誌類に依りて其哲學及び宗旨を研究すると甚だ勤めたり而して此は實に先生が此傳道會の設立に盡力したる原因となれり越えて一千八百八十四年其ワイマールにて設立せられたる以來先生は事務委員の一人にてありき既にして第一傳道區は日本と定まりたれども他に適任の人なかりしかば先生遂に推されて宣教師となりたるは實に一千八百八十五年の初の事なりとす是に於て専ら傳道事業の用意に従事し三四月の交に先づ英國に赴きマックス・ミュルレル氏は傳道會の名譽會員にして且つ印度の事に關して舊識ありしを以て之を主とし廣く交を求め該國宗教社會の景況を審かにし又た其傳道事業を視察し傍ら英語の習熟を怠らず留まると四月にして遂に「リパープール」より亞米利加を経て我邦に渡來したるは實に一千八百八十五年即ち我明治十八年の秋なりとす其始めて來りしときは一人の知己もなく日夜四方に奔走して交を求むるに急に且つ其創創せんと欲する所の

凡百の事業は皆な自ら其局に當らざるべからずして其困難辛苦は得て名狀すべからざりき然れども先生の敏捷智巧と忍耐勤勉と克く其間に處し其周旋の效空しからず月を閲し年を経るに従ひて諸般の事業漸く緒に就き其技倆大に觀るべきものあり前後六年間其創設計畫したる所のもの擧げて數ふべからず蓋し先生は主として傳道に従事したりと雖も傍ら力を教育社會に用ひ當時教育の任に當れる内外國人の顧問となり教育會に臨み或は學校に聘せられて演説を爲し又諮問に答へ婦人懇親會と云ふものを組織して家婦の務を説き女子教育を論じて亞米利加風放縱主義の弊を矯め「ツールオリエンス」を創め獨逸語學術演說會を設けたる等は其傳道多忙の餘力の及ぶ所にして其他人の爲めに畫策せるとも亦幾許なるを知らず之を要するに其我邦に裨益したる所は蓋し鮮々にあらざるなり傳道は其本務なれば尤も意を此に用ひ謂へらく一國民の精氣を興發せんと欲せば之を其少年

子弟より始め涵養馴致の功を積むに非ざれば能はざるなりと乃ち教理を講ずるに主として學生の爲めにせしかば傳聞して來り訪ふ者尤も學生に多く其他高貴の士も亦之れあり皆教に志すものなりき先生乃ち各々部を分ち或は獨逸語を以て或は英語を以て或は佛語を以て或は通辨を用ゐて基督教の要領を講し週間殆んど餘日なきに至れり其獨逸語を以て授けたるもの頃者始めて邦語に翻譯せられたり此書即ち是なり是に於て先生の名聲漸く高く來りて教を承け道を聞かんと欲する者足門に相踵ぎ四方より其演說說教講義等を求むる者亦多かりき是時に當りて先生日々に多事なりしが苟も來り乞ふ者あれば辭するに事を以てすると欲せず輒ち其求に應じたり其最も較著なるものを下谷一致教會青年會に於ける十數回の逐條講義と麴町番町教會に於ける毎月二三回の演說說教となりとす既にして日先生に親炙し其洗禮を受けたる者一教會を設立し名づけて普及福音教會と曰

ふ實に明治二十年二月なり是年秋壹岐坂會堂成り次で芝及び横濱の講義所設立せられ又法典教會の加入ありて普及福音教會の基礎漸く鞏固となりたり然れども普及福音教會は是れ自由神學の花實にして自由神學は則ち其の根幹なり自由神學の基礎にして堅固ならずんば普及福音教會の隆盛は得て望むべからざるなり先生夙に此に見る所あり故に始より専ら重を神學生の養成に置き二十年三月を以て神學校を設立し又獨逸國中諸方より書籍を蒐集し一圖書館を設けて神學生及び廣く諸學生の爲にし壹岐坂會堂の未だ竣工せざるや其處を以て教場及び圖書館に充て教授養成に従事したりしが會堂の成ると共に假りに學校を此に徙し以て明治廿四年に至る此間普及福音教會叢書を公にし次で眞理を發刊し神學校及び圖書館の建築地を小石川にトしたり二十四年二月三並良君先生の訓導を受くると四年の後神學全科を卒はり同三月牧師に任ぜられたり是を新教神學校卒業生の階

矢に自由神學派教師の權輿なりとす是より先「ザクセン、ライプツィル」大公の命あり先生に歸國を促す大公は傳道會の保護者にして先生を愛顧すると特に厚く斯命は蓋し之を擧げて其輦下の「スベリンテンデント」の榮職に任ぜんが爲なり先生乃ち命を奉じ先づ清國に遊び傳道事業を視察す是年一月「チューリッヒ」大學は先生の功を賞し名譽號「ドクトル、デル、テオロギヤ」を贈る報始めて達す留まると四週間にして再び我邦に歸り遂に四月一日を以て横濱を發し歸途印度に遊ぶ歸國の後同年八月を以て「スベリンテンデント」に任せられ職に「イルメナウ」に就き今尙此に在り其居る所の教院は「ルーテル」の寺なりと云ふ

先生は博識多能の士にして學百科を該れ經濟學及び精神病學に通し殊に歴史學に深く羅甸語希臘語希拉語梵語及英佛獨以諸國の語を能し東洋の哲學及び宗旨を諳じ最も西洋哲學及び神學に精し我邦滯在中は又神道の研究に従事したり先生の師とし就きて學びたる大家は

信條學には「ボーデルマン」氏及び「アレクサンデル、シワイツェル」氏新約聖書解釋學には「カイム」氏等にして其の友とし交はる所は「プロフェツツ、イル、ケッセル、リンク」氏（實際的の神學者）「プロフェツツ、イル、プファイデネル」氏（組織神學者）「プロフェツツ、イル、リプツウス」氏（信條學者）「プロフェツツ、イル、ルチウス」氏（教會歴史學者）「プロフェツツ、イル、ホルツマン」氏（聖書解釋學者）等なり亦た以て其の學の淵源する所あるを知るべきなり然れども先生は學者を以て自ら任ずる者に非ず其實際的の神學者たるの技倆は眞に考の子たるに耻ぢず先生の未だ渡來せざるや在留獨逸人は宛も牧者を離れたる群羊の如くなりしが先生渡來の後直に教會を東京及び横濱に設け自ら牧師となり濟々たる多士をして其の鼻息を窺はしめ顯官碩學に畏愛せられたるも實に其の徳望の然らしむる所なりとす其の經營の功は異日果を現今建築中なる麹町中六番町の獨逸教院に結ぶべきなり其他在留諸外國人に尊重せられ又た我邦縉紳大家の愛

敬を受けたる如きは豈に尋常の學者にして能すべき所ならんや人に接する親切にして而して嚴正尤も應對に長じ老幼男女貴賤貧富一たび相見れば則ち皆其友なり簡儉にして而して豪俠の風を存し謙讓にして而して自重の氣象を失はず之に加ふるに勤勉にして能く秩序を守る是れ其の布教牧會の雜務より家政の始末に至るまで事大小となぐ皆自ら之れを整理し交際頻繁の間に處して猶ほ能く綽々として餘裕ある所以なり其事を處するや本を務むるを先とし苟も輕舉妄動せず必ずや先熟慮して後發す其遠謀深略得て端倪すべからざるものあり其布教の方法は平和と建設とあるのみにして曾て攻撃破壞の跡を存せず世に齟齬たる小人あり自由主義の傳播するを好まざ然れども亦公然駁論を試むると能はず陰に卑怯の手段を用ゐて之を妨碍せんと企てたり先生與り知らざるものゝ如し其膝下に在る者血氣方に盛なり勸めて起たしめんぞす先生乃ち戒めて曰く忍耐せよ君子

は争はざる所あり唯愛能く勝を制すればなりと誰れか知らん先生の争はざるは是れ其大に争ふ所以なるを看よ明治廿四年秋始て小石川區上富坂町に現出したる巍々たる煉化石造は先生の曾てより設計したる自由神學者の養成處にして現今に至り漸く盛大に赴くの兆あり其人を視るの明と機を察するの才とは罕に見る所にして傳道創業の如く人を信じて任じ機に乗じて動くの必用あるものを經營するは殊に先生の長處なり其の辨は能く人をして泣かしめ能く人をして笑はしめ能く人をして喜ばしめ能く人をして悲ましむ宇宙の高大人心の幽微皆載せて其三寸の舌に在り然れども先生をして能く其大任を盡さしめたるものは實に其健康の身軀なりとす其衛生に注意して起居寢食の規律ある能く其不屈不撓の精神を養はしめたり他人をして其地に居らしめは其の体力必ず及ばざるなり而して先生は前後數年間疾に臥したると僅に再三度豈壯ならずや古に曰く健康の身軀ありて